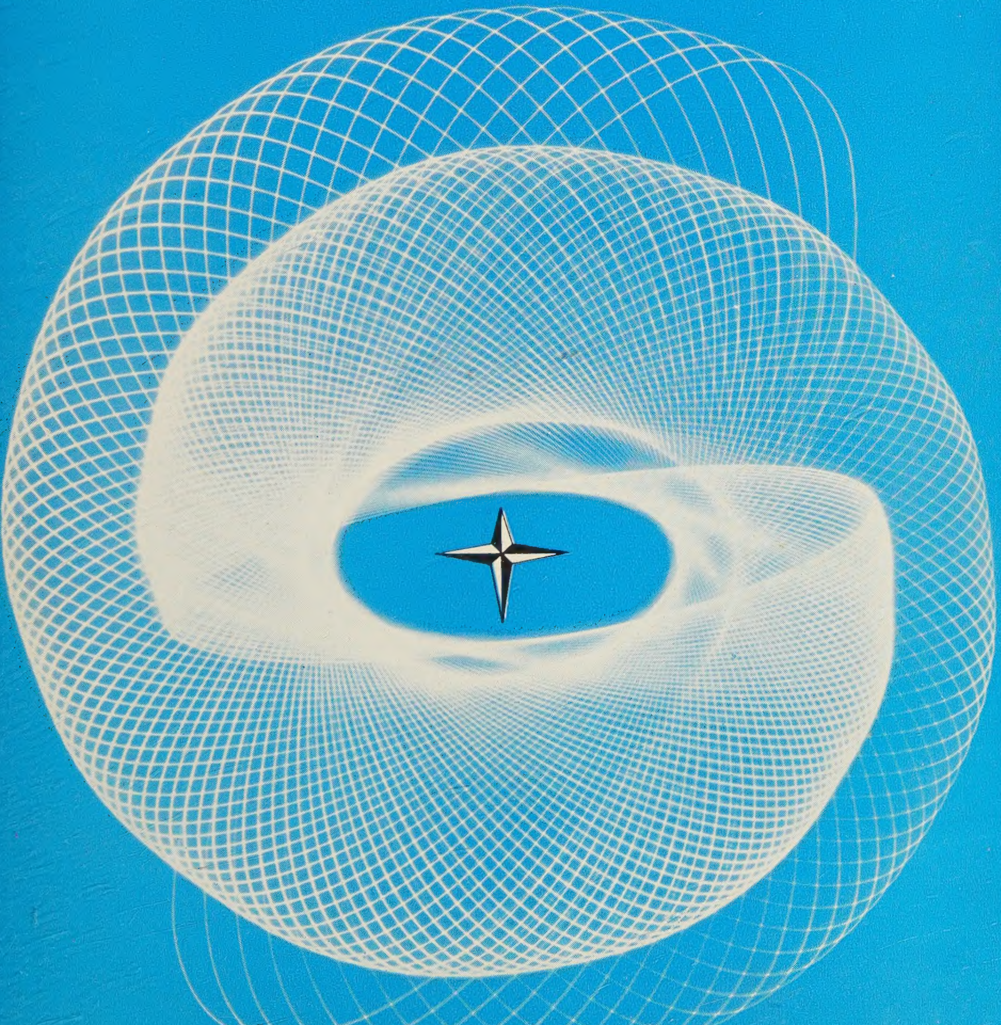
UT OMNES UNUM SINT

学生キリスト者／7

特 集　学生キリスト教運動と聖書研究





季刊 学生キリスト者 第7号（一九六一年七月）

目次

特集 SCMと聖書研究

教会の生命と使命

The Life and Mission of the Church

季刊「学生キリスト者」の目的

1. 日本における学生キリスト教運動（S. C. M. ）を強力に推進するために
   (1) 統一学生キリスト教運動を確立し
   (2) 各大学のキリスト者共同体を強化し
   (3) 学生の福音理解の深化を目指す
2. 大学における「教会の生命と使命」の具体的展開のために
3. 教会の更新と一致のために

心〉これは「弱小Yやミッション系に多い」と書いてあるが、確かであろう。ただ一寸弱小という言葉が問題になるかも知れない。この場合は「参加学生の主体性が乏しく聖書講義に終りがち」であると記されている。

結局二つの類型のいずれにおいても「聖研が生き生きした会になりえず、そこから信仰の源としてのエネルギーが得られぬ（リアリティ、バイタリティが乏しい）」

〈不活潑な原因〉 1、「構成メンバーがまちまちであるため互に対話が出来ない（ノンクリスチャンとクリスチャン）」。従って、2、「とことんまで問いつめて行く厳しさがなくなってどことなく妥協的になる」そこから3、「聖研の位置づけが正しくなされないから……マンネリ化する」4、「信仰を直接聖書から学ぼうとせず、それに類した神学書、文学書、哲学書から何らかの解答を得てしまってそうした書物から得たものをもう一度聖書によって確かめようとしない」「主体的に理解されていないようだ」

〈聖研の位置づけ〉 これは診断書から処方箋に移っている所であろうがここで「現実にぶつかった問題を聖書に問いかける聖研」とまとめてある。これが欲せられるというのであろう。これは先程の「現実の問題を聖書に照らしてみる」というのと略共通の線である。

そして〈要請〉では池田総主事のアドバイスに基いて、「我々の現状にあった聖研の在り方、方法を研究指導する委員会の設定を要請する」という結論が出されている。

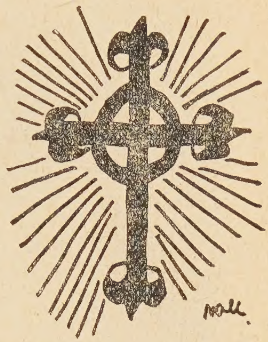
『学生伝道の項では「聖書研究の充実による会員相互の信仰の練達」ということが云われている。交わりが聖研に負う所大であるということであろう。

コミュニケーションについての報告の中では、要望の中に「聖書を真剣に主体的に読む訓練を学Yの中で計る」「学Y運動の聖書的神学的基礎づけが望まれる」こういうことを学Y運動はやってこなかったと叱ってある。

分団の討論の中では学Yの聖研が「問題提起に終ってしまう悩み」が述べられている。これはどうもあたっている。答えが与えられると何か物足りない、問いの形で終った方が主体性があるという感じのようにもとれる。これは後で一寸ふれたい。

〈研究分科会のまとめ〉はまとめとして妥当であると思う。藤森氏は次の如く云う。「学Yの生活の中に聖書研究が中心的場をなしていることは基本的なことである」そして見通しとしては「私共の先輩は生活の中での信仰的契機と現実的契機の媒介統一をきびしく求めて苦闘してきたが、この態度は本質的に聖書的だと思う。」実際に先輩がその通りにして来たかどうかは別として、そういう方向が望ましいとして、まとめられたのである。

最後に、今年度夏期学校カンファレンスの主題の内容の所であるが、これは直接学Yの聖研と関係ないとしても学生諸



学生キリスト教運動における聖書研究の位置とその意義

北森嘉蔵

一

今年一月、大阪の藤沢会館で行われた、全国学Y合同委員会記録を素材として検討することからはじめたい。

私はこれを非常に丹念に読んだのであるが宮本先生も先程高く評価された様に、私もこれは大変よく出来ていると思う。

この中の「学Y現状分析に関するアンケート」の報告の中で『学Yの大きな柱として聖書研究が考えられている』とある。現在学Yでは聖書研究が中心となつている。これには殆んど異論はないと思う。しかしこれに続いて『問題はその読み方、研究の方法である』という言葉がすぐに出てくる。

そしてその分析は、色々の形で出てくるが大体同じような線がでてくる。

たとえば、この中には『神の言が全員個々に生きた言として迫つてきているか』という表現がある。これは裏から云えば聖書研究がマンネリズムに陥っているためではないかという反省である。従って聖書研究をSCMの柱にしようとすれば「各学Yの現状に合った方法をさぐろう」ということになる。

更に「それらを綜合してみれば現実の問題を聖書に照らしてみる」という言葉も根底を流れる共通の意識として取り上げられよう。

分科会の報告の中では、色々の聖書研究の類型とその問題点が指摘してあるがそれもこの通りだと私も思う。

1、学生が主体的にやっているもの。ただ問題は勝手な解釈がなされる危険がある。

2、指導者による聖研（牧師、宗教部主事その他の教師中

講演出来ないようである。ところが通訳の小林信雄さんが一言一句通訳をしたために第一印象は非常に強く響いたらしい。あとで小林さんは「あれは日本人の humility で講演の枕言葉のようなものだ」と弁護してくれた。ところがクレーマーさんは「そういう Japanese humility は自分にとって堪えられない（インペイシェント）ことだ」といって怒られたそうである。翌朝講演をなさる前に「日本文化の専門家でないから他人の書物を読んで御報告する、とは何事だ。それは真摯（シーリアス）でないからだ」とにらみつけられた。これは私にとって初めての経験であった。

さて、学Yに関係している者として同様なことがある。（学生諸君を相手にして話す時には百パーセント自分の考えを云ってしまうのでなく、七分目から八分目に留めておいてあとは学生諸君に花をもたせた方がよい）というような気持である。これもクレーマーさんに云わせると「そういう Japanese humility はイムペイシェントでありシーリアスでない」と云われるに違いない。

しかも考えてみれば、自分の考えた結論の70パーセントか80パーセントで押えておくというのは、ヒュミリティの逆である。ヒュミリティとは一〇〇パーセント自分の考えたことを出しても尚問題が残るという事である筈だ。一〇〇パーセント出すと解決してしまうかも知れないから七、八十パーセントに留めておこうというのは大変な傲慢である。

ですから指導者である私は一〇〇パーセント問題をぶっつけるべきだと思う。それでも尚問題が残るから進歩がある。私は「SCMと聖書研究」の講演においてもシーリアスになって一〇〇パーセント問題を出すつもりである。それでも問題の残る所を検討して頂きたい。

御言からの光にリアルに応じられないリアリティがある事が今迄指摘されたと思う。先程最後に「パスカルがデカルトを包むということに結論があるのではないか」ということが出た。私もこれに賛成であるがその場合問題は包まれるデカルトにパスカルと相容れないものがあるという認識、従ってそこに分裂するかも知れないという二元的なものの厳しさを踏まえた上で一元化しなければならぬと思う。

オスカー・クルマン以来キリストは教会の主であると共にこの世の主である、という事が通説になって来た。所謂同心円として図式化されている。私はこの図式に対し、若し教会を円で表わしたら世界は円と違う図形―たとえば四角―で表わしたらどうかと思う。教会とこの世が矛盾した性格であるということを踏まえた上でキリストがその中心でなければならぬ、ということになると思う。パスカルがデカルトを包むという場合は、パスカルの方が外ではあるがともかく、デカルトの中にある反パスカル性というものを踏まえた上で「パスカルがデカルトを包む」ということが云われねばならぬと思

君の気持がよく反映されていると云える。

「討議の過程を通して二つの主題の方向が出てきた。即ち一方は〃主にあって堅く立つ〃というような神と我々との主体的、実存的関係を問題にしようとする主張であり他方は我と汝の社会的関係を責任の問題として追求しようとする主張であった」

しかし神と我、私と隣人という問題はダイナミックな関係として追求されねばならず、「現実の中における深い矛盾を主体的に受け止めその苦しみの中において絶えず神に立ち返ってゆき神における和解を計ることを意味するのである」ことが確認されている。

このような分析や見通しの上に立つて、夏季合同集会の在り方についての協議の中では「聖書が自分にとつてリアルでないということは自分が主体的に聖書の問いに答えていないからであり、きびしくないからである。又直接的に信仰をつかもうとするからである。信仰は現実的な契機、媒介を必要とする。」

こういったことが夏季学校カンファレンス内容として伝えられている所である。

私はこの報告を読んで大変よく分った。恐らくその場に出席していれば渦中にあるという点で逆によく摑めないようなことが、却って委員会の承認を得て作成されたこのレポートがより正確に把握させてくれるとも云える。これは青写真的なものではあるが、学生諸君が答えらしきものを追求しようとする可成り積極的な動きがみられる。たとえば「信仰を直接的に持とうとするから崩れてしまう、信仰は現実的な契機媒介を必要とする」といったことである。

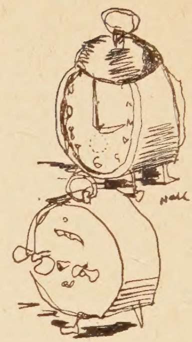
実は私が「学生キリスト教運動における聖書研究」という題でお話することも大体似たようなことなので一寸先を越された感がないでもない。実は学生諸君は私共指導者の側からの発言はとかく疑ってかかる様な傾向があるが、同じ結論でもこの様に学生諸君の側から到達した点に大いに意味があると思う。

二

私はつい二、三ヶ月前にこの天城山荘で私にとってはエポック、メーキングとも云える一寸した経験をした。

ヘンドリック・クレーマさんが来日された時の最初の協議会がここであり、私は「日本文化とキリスト教」という発題をさせられた。

予めメモも提出させられ、私としても二、三ヶ月かかって関係の書物を読んで調べたのではあるが、――これは私の悪い癖だと自分でも思うが――講演の始めに一寸云い訳をした「私は日本文化の専門家ではなくただ些か勉強したことを材料として提供するだけである。どうか皆さんが主体的にお考え頂きたい」と。どうも日本人はこうした云い方をしないと



科学の真理と福音の真理

大須賀潔

私に課されたことは、科学の真理と福音の真理ということである。二つの真理を、このように対置することによって、課題者は何を意図したのだろうか。私たちが学校で学ぶ学課から得る様々の真理、殊に自然科学的真理と、聖書が伝える福音の真理との間には、必ずしも一致があるわけではない。というよりは、背馳する場合が多い。そこで、キリスト教徒として、福音を真理として受容するとすれば、科学の真理を否定しなければならないのだろうか。もしそのようなことをすれば、この科学時代に恥かしい許りでなく、私たちの良心は、そうすることに痛みを覚える。良心が痛みを覚えるというのは、科学が真理として告げることを拒否することが真実に眼を覆うことになり、その結果虚偽の横行を許すことになるからである。

この問題提起に対して、私たちは、この二つの真理は、異なる存在の次元に属するのだから、一を採って他を捨てる必要はないのだと教えられる、そして私もそう考える。だが、次元が異るとはどういうことなのだろうか。一階と二階とはちがうということだろうか。一階で通用することと二階で通用することとは必ずしも一致しなくてもよいと言うのだろうか。確かに、一階で真であることと二階で真とされることとの間には相違はあるだろう。たとえば、一階は低く二階は高い。したがって、一階よりも二階の方が展望がきく。そうすれば、一階で見えない、換言すれば、一階では存在と認められないものが、二階では存在と認められることになる。この場合、一階二階に別の人が居るとすると、その人たちにとっては、その家の環境は異って現われるわけである。二階の人の環境（存在）に就いての報告は、それを見ていない一階の人には、どうして受容れられるだろうか。それには、二階は一階よりも位置が高いのだと言うことが承認されていればいいのだ。位置の高いところほど展望がきくのだから。このことが承認されていて、はじめて、二階の人の報告は一階の人の受容するところとなる。即ち、真理としての権利を認められるのである。

う。

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そしてついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう」(ヨハネ一〇章一六節)。

ここで「他の羊」と他者性がみとめられている。しかしそれは「この囲いにいない」羊として否定を認めた上で「ついに一つの群れひとりの羊飼となるであろう」と外側の円が認められている。キリストは他の羊の羊飼でもあり給う。しかしそれは「なるであろう」であって今そうであるとは書いていない。

そういう Extra Christological な面がある。

これが聖書研究においても、それが妥当になされて、つまり上から光を与えられて而も下から分析された現実がいきなり一元化出来ないという面があっても、それととり組むことが仕事だ、ということになる。それととり組むことが、固有の仕事だということになると思う。

(三月に行われたLMC第二回指導者協議会における講演要旨、文責編集部)

(東京神学大学教授)

(二三頁より続く)

話が大分横道に入ったが、要するに私はクーデターによって日本人の韓国への関心が冷淡な方向にあおられ、韓国の善意に満ちた人々の日本への呼びかけまでが黙殺されてしまう事を憂えているのである。南北の平和統一の悲願は恐らく二大世界の対立自体が解けない限り不可能である事はドイツやラオスが教訓的である。そうだとすれば資源的に貧弱な韓国の民衆が窮乏にあえいでいるのを黙視できるであろうか。一部の人は、それは呼びかけられている統一を進めない方の自業自得だと割り切るであろうが、世界史は善玉と悪玉に截然と分けられる程単純ではない筈である。

殊に基督者として、韓国の主にある兄弟達と呼応し、共に世界の問題を考え、重荷を分とうとする事は当然である。勿論我々は「蛇の如く賢く」政治のからくりを見抜き、悪の力に利用されない様に注意しなければならない。そうでないと明治末年組合教会が朝鮮総督府の機密費をもらって、朝鮮伝道を開始した様な善意ある錯誤を犯すであろう。実際韓国の独立を助けないで何の伝道であったろう。私達はそれ故韓国の市場を狙う資本家の動きにも、独善に陥り勝ちなアメリカの対外政策にも目を覚ましていなければならないが、その故にこそ韓国の兄弟と真の理解と提携を進めてゆかなければならない。それによって我々は和解と平和を宣べ給うキリストの僕として仕える事ができるであろう。

四月五日、私達を再び釜山港に送りに来た多数の韓国学生の、今は完全に打ちとけた親愛の眼と惜別の情、そして何時までもちぎれるばかりに振っていた手の波が、私達の胸の底に焼きついている。

(同志社大学教授)

出遭われるのである。だから、私たちが出遭う対象は、それぞれ個体的な存在である。一定の空間時間の状況の中に現われて来るものである。そこでその時離れれば、またそのようにして遭うことのない存在なのである。ということは、その存在がそのような個性的な存在であると言うことではなく、却って、私たちの態度が対象の現われ方に関係するということである。日常の生活の場で、私たちが出遭う対象が、右のように現われるのは、そこは私たちの生存という自己中心性が働いているからである。自己の生存に執着する中心性の故に、対象は、私たちにその時、その場で利害関係を持つものとして、このもの、あのものという性格を持って来るわけである。

科学の真理探究においては、対象は物一般として、その存在が認められるということは、その存在を把えている主体が、生存の自己中心性から解放された主体なのである。このような解放された主体の意識において、対象は、はじめて、物一般としての性格を持ち得るのである。したがって、科学の真理としての法則、存在の構造は、右のような主体の意識の立場において現われるところの存在の構造だと言うことが出来よう。そこで、科学が私たちに教えるところの真理は、世界（存在の全体）の本質的側面に関わるものであると言うことが出来る。

ところで、私たちの前に置かれている存在に関わって、私たちが知らなければならないことは、その構造で尽きるのだろうか。科学が存在するものの存在の構造を問うことを任務として、敢えて問うことをしないところの前提、即ちものの存在それ自体は問う必要のないものだろうか。そこに存在しているそのものは、どうしてそこに在り、そのような形や色をしているのだろうか。或いは、何故に、そのもの（存在）は、そのような構造であって、他の構造を持たないのだろうか。私たちは、このような問いに対して、その存在の形成過程を歴史的に説明することによって、そのものが、いまここに、このような形になっている所以を説明することは出来る。しかし、私たちは、更に、私たちの問題としていることは、実は、何故、このものが、いまここに、このように形成されて来ているのかを知りたいのだと反問しなければならない。それは右の答えが、存在の形成過程の説明であるからで、私たちの問いは、その存在の権利根拠への問いなのであるから。

現に、あるものがそこに在るのは何故か、という問いに対して、その生成過程を以て答えるのは、実は、そのものの存在の法則による説明なのであって、「存在」が問われているときの答えにはならないのである。そこに、そのものが在るのは何故か、という問いが発せられるのは、一体、どのような存在状況においてだろうか。そこに、そのものが在ることが疑われているわけではない。実は、そこに、そのものが在ることを認める故に、そのように在ってよいのかが問われているのである。たとえば、私が愛する人に贈物をした。そしてその贈物は、現にその人の手に在る。その場合、いまその物は、そこに在ることが正しいことなのであって、余人の手中に在ることは正しくないのである。私たちは、このような場合、愛人が自分の贈物を持っていてくれるのを見たとき、よかったと思う。それは贈物が在るべき場に在るからである。換言すれば、その品物の在るべき場即ちその品物の許された権利の場に在るからである。科学は、このような意味で存在を問うことをしない。それは、そのような関心が事実として、科学にはないということではなく、科学

私たちが、科学の真理と福音の真理を対置し、そこにディレンマを感じるのは、それら二つの真理が真理性を争うことになるからだ。次元がちがうという答え方は、それら二つの真理は別々の事柄に関わるものだと主張することだ。だが、ただ事柄がちがうとだけ言ってみたところで、どうちがうのかが解らなければ、その主張は二つの真理に、それぞれ権利根拠を与えたことにはならないのではないか。前の例で言うと、二階は一階より高いと言うこと。だがそれだけでなく、展望のきく二階で認められる環境（存在）に一階でのそれが含まれるのでなければならない。二階において把え得たより多くの存在の量が、位置の高さに原因しているということであって、二つの真理主張は共に承認されるのではないだろうか。この場合は一般性が特殊性を包摂していることであり、一般性の成立の根拠が明らかにされているわけである。

さて、科学の真理と福音の真理の、真理主張の矛盾は、どのように解くことが出来るであろうか。これは一般性と特殊性の関係として解くことは出来ないであろう。一般性と特殊性の関係として、一方が他方を包摂するものとして示される真理性は、共に同一の種類のものと見做し得るものでなければならない。ところが、科学の真理と福音の真理は、同一類に属する真理性とは考えられないからである。それでは、私たちは、科学の真理性の性格から見てみることにしよう。

科学の真理は法則（自然乃至社会）として提示される。法則とは一体何であろうか。これは感覚的経験によって与えられた与件を分析し、分析的に採出された基本的要素間の関係として、課題となっている事柄が構想され、それが実験によって検証されたとき、私たちは、その構想——要素から事物が成立する過程の構想を、法則と認めるのである。それ故に、私たちは、法則の指示に従って、それらの要素を関係せしめるならば、他の条件が入って来ない限り、所期の事態を作り出すことが、何時何処ででも可能なわけである。ということは、法則は、存在の構造なのだということが出来るであろう。

存在の構造ということは、その存在がどうなっているかということである。科学は、このような存在の構造を知ることを目的とするのであるとすると、一つの前提の下にあると言わなければならない。即ち、私たちが、あるものを科学的に知ろうとする（その科学的真理を探究しようとする）とき、私たちは、その対象の存在を認めているわけである。たとえば、水を研究の対象とするとき、私の前におかれている物質が、水と名附けられるものであることを知っているので、それがどうなっているかを知ろうとするのである。もっと精しく言うならば、そこにおかれている物質を「一つの種」として認めているのである。科学は、直接には、このもの、あのものを取扱うが、実は、このもの、あのものにおいて、それの種としての存在に関わっていることになるわけである。そこで、科学は、実際には、このもの、あのものを取扱いながら、これをも、あれをも形成している構造——法則——を知ることになるのである。

さて、科学的真理の探求は、このもの、あのものが、これら一般において把えられることによって可能になる。ところが、生活の現実において、私たちが出遭う対象は、そのような一般としての存在ではない。それらは、私の生存にとって利害関係のあるものとして

うな意味ある存在者には、そこに在ることを拒まず、許すのである。即ち、存在の権利を承認するのである。そこで、私たちは一般に、存在の権利根拠は、そのものの存在の意味だと言うことが出来るであろう。

そこで、科学がそれを前提にするところの存在それ自体の問題に答えるものは、それが存在の権利に関わるものである故に、存在の意味を以て答えられなければならないことになる。この点にこそ、宗教の本来の場があるのではないだろうか。ということは、宗教の関わるところは、存在の意味の告知だけに限られているということではない。勿論、宗教の真理の関わるところは、存在の構造の認識であるわけではなく、正に、存在の意味の告知である。だが、そのことは、「限る」という言葉が意味するように、存在のある領域、精神のある働きに限られていることではない。すべてのものは存在する。世界とは存在の全体である。存在の意味の告知の関わるところは世界の全体、一切の存在に及ぶのである。そこで、存在の意味の告知を内容とする宗教の真理は、存在の全領域の構造を探究し尽そうとする科学の真理と、いたるところで相接することになるのである。

以上、私たちは、科学の真理は存在の構造（法則）の開示であり、宗教の真理は存在の意味の告知であると結論することが出来たわけであるが、そこで、はじめに提起した問題に戻ることにしよう。即ち、これら二つの真理は次元を異にすると言うのは、以上の論及から、どのように言うことが出来るのだろうか。両真理の関わるところは、存在の全体であるから、両真理は異る部分に就いての主張（たとえば天と地、無形の存在と有形の存在）であるのではない。また、一般と特殊のように一方が他方を含むという関係にあるのでもない。この両真理は、両々相俟って、存在に就いての真理を完成するのである。だから、この二つの真理は、表裏、内外のような関係にあると言うことが出来るであろうか。表から見れば裏を見ることは出来ない。反対に裏からは表は見えないのである。この二つの真理は全く相背馳した立場から把えられた真理だからである。外を作り給うことによって内をも作り給うた者において、本来一つである真理なのである。

私たちは、いままで、あまりにも一般的な問題として論じて来たようである。私たちは、ここで、宗教の真理と前に記した事柄を福音の真理と置き換えることによって、問題を具体化することにしよう。福音の真理とは、他でもない、パウロが「ガラテヤ人への手紙」の二章で用いている言葉であるが、これとペテロ、バルナバなどが福音の真理を曲げて、業の義を立てようとしたことを非難する箇所に用いられているのである。そのような脈絡から見て、福音即真理、すなわち罪を犯した人間が審かる（禍音）ことなく許されていること（福音）を指していると解してよいであろう。そして、このことを告知したのはイエス・キリストであった。ペテロはゲネサレ湖において、イエスの指示に従って網を下し、余りにも大きな漁獲に接した時、自らの罪を告白している。彼の自明であった生存はここで、イエスによって問われるものとなっている。マグダラのマリアにおいても、彼女に生存の真の危機を開示したのはイエス自身であったろう。彼女が自明なる自己から脱しようとして跪いていた時、パリサイ人たちによって捕えられたのであった。姦淫の現場で

はこのように問うことは出来ないのである。一般として把えられた存在が、科学の究極の前提であるから、科学が存在の存在性を問うことは、自らを破壊することになるから、問い得ないのである。それ故に、事物の存在を問うこと、その存在の権利根拠を問うことは、科学の任務には属さず、他の精神の働きの任務に属するであろう。

　科学の対象としての事物の一般としての存在は、日常の生存において働く、欲求的主体の自己中心性から解放された主体、意識一般としての主体に応ずるものとして現われたのであった。事物の存在そのものが問われるのも、やはり、それを問う主体の在り方に対応する。即ち、欲求的主体においては自明のこととされていた自己の存在が、問題と化するときがある。私たちの自己（主体）が、在所に迷うことがあるわけである。そのように、問う主体が問われるものとなるとき、存在も問いのうちに入れられることになるのである。前例によって例示すると、贈物が愛人の手に在ることが問題となるのは、私の愛人としての存在（私の愛人の愛のうちにおいての位置）が問われるときである。私がその人を愛することの権利根拠が疑わしくなったとき、私の贈物が相手の手に在ることも問題化してくるわけである。私が人生における在所に迷い、自己の生存が問題化したとき、世界の一切の存在は問題化してくるであろう。私の生存が問題化すると言うのは、私の日常的自己即ち自然的主体の自己決定性が通用しなくなる時である。自己決定的に自明のものとして肯定されていた生存権が、自己決定を許さないような事態に直面するとき、私の生存の全体、生きているそのことが問題化してくるわけである。

　このような存在そのものが問題として問われている、そうした問題に対する答えは、もはや、存在の構造を示すことによってはなしえない。ここで問われているのは、存在及び生存の権利である。権利を根拠づけるものこそ、その答えでなければならないであろう。一体、あるものがそこに在ってよいか悪いかを決定するものは何であろうか。たとえば、応接間のテーブルの上に美しい花を挿した花瓶がおかれている。これはここに置かれているのはよいことかわるいことか。おそらく、誰でもよいことだと言うだろう。何故だろう。それは花瓶は応接間という場に相応しいからだ。応接間というのは、人々がそこで話しをするところである。話しは時には、喧嘩であることもあるだろうが、正常の話は、愛情を前提にした語らいである。私たちは、愛情の授受には細心の注意を払い、出来るだけ充分に自己の心を表現しようとするであろう。そのような表現こそ美しいのだ。だから、愛は常に美を伴う。美を場として愛はかようことが出来る。応接間が本来、このような場であるのだから、美しい花がテーブルにおかれているというのは相応しいのであろう。とすると花のある花瓶が応接間に相応しいかどうかを決定するものは、場であるように思われる。場が若しそういう場でなかったら、花は必ずしもそこに在ることが相応しいものとならないであろう。しかし、花のある花瓶が応接間におかれているのを相応しいものとするのは、場だけではない。花の持つ価値（美）が場の要求に応じることが出来るものだからでる。場の性質と存在者の持つ価値が相合うことによって、そのものの存在が、その場に相応しいものとなる、意味あるものとなるのである。その花は、その応接間に入る人を楽しませるという、存在の意味を持つわけである。私たちは、このよ

聖書をどう読むか

―聖書解釈の問題―

関田寛雄

……………………、だって、そのように聖書に書いてあるのです。聖書は神様の御言葉なのですから、それはほんとうです。わたしはようそは申しません。」

これはある大規模な大衆伝道集会に出席して、決心をした若い姉妹がカウンセラーの人から聞いた言葉です。「聖書はどうして神様の言葉である、といえるのですか。聖書をどう読んだら、そのことが分るのですか。」と不安そうに私に質問された姉妹に、この一文によってお答えができれば幸いです。

1 「聖書をどう観るか」

「聖書をどう読むか」の前に、聖書とは何であるか、「聖書をどう観るか」がはっきりされなければなりません。

「聖書は神の言葉である」といわれますが、しかし又ある時代、ある場所で生きていたある人々の手によって書かれた、いわば「人の言葉」であることも事実です。ホーマーの詩や古事記、日本書紀と同様、その時代の歴史的事情を反映し、その著者の知識の限界、主観的判断を反映している古代の文献の一つです。イスラエル民族の宗教思想、道徳、風俗、習慣や、原始キリスト教社会の生い立ち、思想の発展等が画かれている古文書の集成です。この昔の文献にすぎない「人の言葉」と、今日私たちの全生活を力強く支える所の「神の言葉」とは、一体どういう関係になっているのでしょうか。ある人は「人の言葉」の面だけを見て「神の言葉」の面を見ないものですから、せいぜい「聖書には良い事も書いてあるな」の程度で終り、後は「ツンドク」になります。他方ある人は「神の言葉」の面だけを見て「人の言葉」の面を見ないものですから、一字一句を律法のように考え、初心者の人にも論理無用の強圧戦法に出て、パンを求めるのに石を与える者（マタイ七ノ九）になり、果ては「いわしの頭も信心から」ということになってしまいます。

聖書は「神の言葉」であることもほんとうですし、「人の言葉」であることもほんとうです。しかし大切なことはこの二つが聖書の性格であって、これを切りはなしては聖書でなくなるということです。この問題は宗教改革以来四百年間、論争をつづけられてきた大

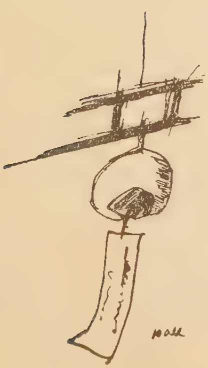
捕えられたのであったから、彼女の生存は石打ちの死を運命とした。しかし、彼女が自己の生存を真に問われたのは、パリサイ人たちによってイエスの前に引き出された時であったであろう。しかし、弟子たちが、真に自らの生存の危機に立ち、自らの生存が問題と化したのは、イエスの十字架の死とそれに続く復活においてであろう。何故なら、ここに完全な許しがあったから。彼らの生存は、自らの価値とは全く無関係に、場の方から圧倒的に可能にされたのであった。彼らの自明なる自己決定的生存は徹底的に問い詰められ、無に帰したであろう。しかし、その脱殻の自己が、全き生存の保証を得ていたのである。彼らの生存は完全に意味を認められているのである。彼らの生存権は全き承認によって成立しているのである。彼らは自らを「神の子」——神の愛の裡に本来の生存権を持つ者——として自覚した。そして、神を愛の主体として崇めたのであった。ここから、他者も他の存在も、自己と同様に存在権のあるものとして認めることが出来るようになるのである。世界の全体は、彼らがそうであるように、神の栄光を讃えることを、その存在の目的としていると考える。彼らにとって世界は愛の神の支配、意味づけの下にある。しかも、神の自己犠牲による意味づけの下に。したがって、世界は成るようにしかならない生成の場としては受取られない。世界は創造の場なのである。これが、存在の根源の理法なのである。

　このような真理の認識は、科学的には否定されなければならないものだろうか。福音の真理は宗教の真理であり、それは存在の意味の告知である。聖書は、右のような存在の意味を告知するために、様々な限定された媒介を用いなければならなかったであろう。言語表象、時には世界像さえも。しかし、それらは、弟子たちがイエス・キリストにおいて体得的に理解したところの、生存の意味を表現するための手段であるにすぎない。福音の真理は、それらの媒介的表現を生んだところの、生存の意味の体得的理解なのであり、イエスの死後、七十年に亘る内省の結果、教会が「神は愛である」と端的に表現し得た事柄なのである。

　福音の真理は、以上のように、存在の意味に関わる真理であるのだから、前の論述において見たように、科学の真理に対しては、矛盾するどころではなく、それを裏付けるものとして、真理を完成せしめるということが出来るであろう。

　私は、科学の真理と福音の真理という対置の暗示する問題をただ一つだけしか論じることが出来なかった。問題はまだ多角的に論じらるべきものを残している。紙数の関係上、他日に残して擱筆する。

（立教大学教授）



と、「人の言葉」とをどのようにして区別することができるのでしょうか。特定の信仰的立場からする場合も、歴史的研究の結果から判断する場合も、それは単なる独断か、又は相対的な、蓋然的な境界設定にすぎず、結局聖書を人間が裁くことになってしまいます。プロテスタント教会はこの主観的聖書観によって、ますます小教派に分裂して行きました。

(5) バルトの聖書観

一九一八年、第一次世界大戦の灰燼の中からカール・バルトの「ロマ書」が現れ、四百年の時間の距りをこえて、宗教改革の聖書観を新しく回復しました。彼は聖書の「神の言葉」としての面と、「人の言葉」としての面とを「無限の質的差別」として捉えました。彼はルターのいう聖書の二重性格の異質性と同時に不可分性を承認し、聖書が「神の言葉」であるのは、それが聖霊によって「神の言葉」となることなのである、と理解します。聖書はそのまゝで「神の言葉」であるのではなく、聖霊の働きによって「神の言葉」になるのだ、ということの発見は、聖書観にとって革命的でした。宗教改革において明言されなかったことが、今や明るみに出されたわけです。「人の言葉」と「神の言葉」という聖書の両面が、過去四〇〇年の誤った見解を克服して、正しく位置づけられたのはバルトの功績でした。

所で今までのべてきた「人の言葉」と「神の言葉」という聖書の二重性格は、「文献」と「正典」という用語で表現されます。「正典」としての聖書は、第四世紀に、キリスト教会がユダヤ教の正典であった旧約聖書を、新約聖書と共にキリスト教会の正典と決定したものです。即ち、その当時の能う限りの判断によって、その使徒的性格が明らかであるもの二七巻を選び（この限定については長い論争が続いたが）「新約聖書」とし、すでに一世紀の末からユダヤ教の正典とされていたものを「旧約聖書」として受入れ、こゝにキリスト教会の存在を規定する正典が誕生したのでした。正典を決定した主体は教会ですが、決定された正典が逆に教会を主体的に決定するようになり、今日に至っているわけです。それが、教会の歴史であるともいえるでしょう。したがって「聖書を信ずる」とは聖書を決定した教会の信仰的決定（伝統）に参与することですから、教会なくして聖書はなく、聖書なくして教会はありません。聖書が過去に長い論争を経て正典として決定されたのは信仰的に見れば聖霊によることであって、その限りにおいて正典は絶対的な限界（六六巻）をもっています。そして又、聖書を現在でも私たちの信仰と生活の基準であると信仰によって告白する以上、それはやはり絶対的な性格をもっています。教会は、私をも含めて、聖書によって立ちも、倒れもするのです　かくて聖書は信仰において絶対的な「神の言葉」であるわけです。

他方、文献としての聖書は、イスラエル文化史や原始キリスト教史の対象として民族、風俗、思想、文学等の貴重な史料となりますし、その限りでそれぞれの価値をもっています。それは信仰とは関係なく、歴史学の対象として意味をもっています。それがどのようにすぐれた文化的価値をもっているかが、たとえ立証されたにしても、それは信仰の根拠にはならない、文化の世界の事柄です。ですから教会がその信仰の規範として聖書をもつ場合、それはいうまで

問題です。その歴史を簡単にふりかえって見ましょう。

(1) 宗教改革の聖書観

聖書は「神の言葉」であると共に「人の言葉」であることを、初めて明確にしたのはマルチン・ルターでした。彼は聖書を聖霊の証しによって、私たちをキリストへ導く唯一の神の言葉であると信じて、カトリック教会のように、聖書を法皇と並べることに反対したのです。しかしこの「聖書のみ」が神の言葉であるとの信仰に立っていたからこそ、ルターは又その「人の言葉」としての聖書に対して大胆な批評をしました。ヤコブの手紙を「藁の書簡」だとか、エステル記を「なければよかった」とかいうことができたのは、彼が聖書の二つの性格のちがいと同時に切り離せないことを知っていたからなのです。

(2) 正統主義の聖書観

宗教改革が進んで行く中に、改革的信仰の正しさを重んずる余り、聖書の一字一句が誤りなく神の言葉であって、各書の著者は聖霊の書記である、という逐語霊感説、聖書絶対無謬説が主張されるに至りました。宗教改革以後一八世紀半ば頃までを支配したこの正統主義は、一方にカトリックの伝統主義に対して聖書の権威を主張し、他方宗教改革の傍系として現われた狂熱的な主観的信仰に対して、客観的な信仰の規準を強調した点で功績が認められるのですが、それは「人の法皇」に代るに「紙の法皇」をもってし、聖書はそのまゝ「神の言葉」であるとして「人の言葉」としての性格を無視してしまいました。聖書は超自然的な書物として批判は全く許されなくなった、と同時に教義立論のために至る所から都合のよい句が矢たらに引用される教科書のようなものになってしまいました。

(3) 自由主義の聖書観

正統主義の反動として自由主義が現われました。一八世紀末以来科学の目ざましい発達は、教会の権威や聖書の無謬説に対して大胆な批判を加えることを促がしました。人間は理性に対して自信を抱き、更に歴史学の進歩と相俟って、聖書の成り立ちが、超自然的な原因によるものでなく、その時代と環境の産物として有限な、相対的な一つの文化遺産である、と結論いたしました。この立場からは「人の言葉」の面のみが強調されて、聖書の「神の言葉」としての面は全く没却されています。聖書は歴史上の他の宗教文献と比較して特に独自なものはなく、進歩した人間の理性や道徳的意識に照して見れば、到底信奉するに足りない古代の遺物が含まれている、と考えたのでした。こうして、正統主義とは逆に、聖書の「神の言葉」の面は失われ、聖書は全く「人の言葉」と考えられました。

(4) 中庸主義の聖書観

一九世紀の半ば頃、ドイツのエルランゲンを中心として起った神学の傾向で、英国等に今日でも強い影響力を残している中庸主義の立場は、自由主義の「人の言葉」としての聖書観に反対しましたが、しかし同時に、正統主義の単に「神の言葉」として聖書を見る見方にも同調できず、「聖書は神の言葉を含む」という見解に立ちました。聖書のある部分は「人の言葉」であり、ある部分は「神の言葉」であるというわけです。ところでこの立場は一体、「神の言葉」

(2) 教義的解釈（Dogmatic Interpretation）

これは教会の教義によって聖書を解釈しようとするもので、テルトリアヌス（Tertullianus 160～220）やキプリアヌス（Cyprianus 200～258）等に始まるものです。これは聖書は教義・伝承にあてはまる限りにおいて価値ありとする立場であって「先づ汝の信ずべきことを学べ、しかして後、それを見出す為に聖書に行け」（Hugo 1141 死）という言葉がよくこれをいゝ表わしています。プロテスタント正統主義の時代には聖書は神学者の教義立論を権威づけるための証拠章節になってしまって、それぞれの教会が、その信条を擁護するために聖句を機械的にその文脈とは関係なく引用するということになりました。更に聖書は一字一句「キリストの手」によって書かれた絶対無謬の書であり、著者は聖霊の口授によって書いたと考えられ、聖書の神的権威が一方的に強調されたため、その人間的側面が無視されてしまいました。この解釈は教義を聖書の中に無理に「読み込み」、旧約聖書の中に直接三位一体論を見ようとし、同時に聖書の記事の矛盾をなくすために機械的に調和をはかり、三福音書にあるヤイロの娘の死と復活の記事を、イエスが三度行った奇跡と解釈しました（オシアンデル Osiander 1498～1552）。ベンゲル（Bengel 1687～1752）が聖書の年代の計算からキリストの再臨を「紀元一八三七年」と結論したのもこの解釈の一例です。

(3) 歴史的解釈（Historical Interpretation）

むかしアンテオケ教会を中心とした解釈でテオドルス（Theodorus 428 死）等がその代表でしたが、その影響は永続きしませんでした。しかしルネサンス以後、古典復興の波にのって、聖書の文法的歴史的解釈が起ってきました。これは今日ますく徹底した姿で行われている、多くの重大な問題を含んだ解釈ですので、問題を福音書研究にしぼって概観して見ましょう。

a、信仰が信条に縛られ、動的な生命が涸渇して、聖書の逐語霊感説の支配し始めた正統主義の時代の教権主義を打ち破って、いわゆる信条のキリストと、実際の歴史上のイエスとは異っていることを大胆に宣言したのは、ライマルス（Reimarus 1694～1768）でした。近代の歴史的批評的研究は、反教権主義と事実そのものへの関心によって啓蒙期に始められたわけです。ライマルスの「イエスと彼の弟子の目的について」（一七七八）はレッシング（Lessing 1729～1781）によって刊行されていますが、レッシングはライマルスの所論を更に哲学的に深め、「歴史的真理は相対的である」とのべました。歴史的啓示にその基礎を置く教会にとって、これ程恐しい言葉はありません。教会は自己のよって立つ福音の絶対性をどう弁証すべきかに苦しみました。この問題は教会の神学の形成に大きな影響を与えました。カント的な倫理的な聖書の理解、ヘーゲル的な精神史的な聖書の理解、シュライエルマッヘル的な感情的心理的な聖書の理解等々、問題の解決を求めて近代神学は苦闘したのでした。

b、一八三五年という年は聖書の解釈史上特記すべき年です。それはシュトラウス（Strauss 1808～1875）の「イエス伝」発刊の年です。彼はその師バウル（Baur, 1792～1860）についてチュービンゲンで学び、ヘーゲル哲学によるキリスト教の再理解に著しい関心を示しました。歴史は絶対精神の自己展開の過程であるというヘーゲル的歴史観は、相対主義に苦しむ神学者に救いをもたらしたか

もなく、「正典としての聖書」、「神の言葉としての聖書」を意味しているのであって、決して「文献としての聖書」、「人の言葉としての聖書」を意味しているのではありません。今日までの教会と神学の不幸な問題はこの二重性格の混同にあるわけです。たとえばブルトマンがイエスの歴史像を福音書の中に見出そうとする試みを積極的に評価しない（ブルトマン「イエス」序文参照）としても、それは歴史的文献としての聖書に対する一つの結論なのであって、それとともにブルトマンがイエスへの信仰を否定していると考えるのは大きな誤解です。私たちはこの二重性格の区別をはっきり知ると同時に、その不可分離的な性質を承知しておかねばなりません。そして、聖書を「聖書」として信ずる以上は、「正典としての聖書」の立場に立って考えて行くべきだと思うのです。それは「文献としての聖書」の観方を排除したり否定したりするものではなく、それぞれをあるべき位置において考える、ということなのです。そうでないと、信仰者は聖書の歴史的批判的研究はできなくなり、歴史家は信仰の書として聖書を観ることができなくなってしまいます。信仰と科学の闘争は聖書の解釈においても、従来、数々の悲劇をもたらしてきました。私たちは両者を共に生産的にするために、正しい位置づけを知らねばなりません。

2 「聖書をどう読むか」

今まで「聖書をどう観るか」について、いわば聖書論についてのべて来ましたが、これから「聖書をどう読むか」について、いわば解釈論についてのべましょう。

聖書を解釈するとは、「聖書が何を語っているかを、今、こゝで聞く」ということです。こゝには二つの事があります。一は聖書の語る事柄で、他は今、こゝで聞くという解釈者の状況と行為です。聖書の解釈は、聖書とその解釈者が「我と汝」という関係の中で対論することを意味します。この正しい関係が明確でなかった所に聖書解釈の歴史に見られる客観的機械的解釈や主観的恣意的解釈が起ったのでした。それらの足跡を二つの流れに分けてしばらく辿って見ましょう。

(1) 寓意的解釈（Allegorical Interpretation）

これはアレキサンドリアのユダヤ人哲学者フィロー（Philo B.C. 25〜A.D. 40）等にその典型的な例を見出す解釈で、オリゲネス（Origenes 185〜254）が聖書解釈に適用した方法です。「寓意」（Allegoria）とは「他のものによって語る」ことを意味し、聖書の文字を象徴的なものと考え、その語句の背後にかくされている意味を読みとろうとすることです。この解釈は聖書の文献を、今も意味あるように読もうとする努力の表われであって、聖書の語っている通りでは満足できず、そこに何か超越的、霊的な秘義を見ようとしたのです。従ってたとえばアブラハムがその子イサクを神への供物とするためモリヤの山へつれて行った時、イサクの背負ったたき木は、実はキリストの十字架を意味するとか、ヨハネ福音書二一章の魚一五三尾は十誡と第七日（安息日）を加えた（律法＋恩寵）一七を、一から一七まで加えれば一五三になるとかいうように解釈します。このような解釈は今日も一部に行われているようですが、これは聖書に即して読むというより聖書に「読み込み」をして、聖書が語っていないことを敢ていわせようとするものです。

す。この解釈の特色は福音書を「傾向文書」であるとすることです。即ち、すでにケーラー（Kähler 1835~1912）によって知られていたことですが福音書は単なるイエスの伝記ではなく、厳密な意味で年代記的歴史でもなく、むしろそれは意図的に「イエスは主である」ことを証言する告白の書であり、宣教と弁証の訴えをもった「傾向文書」であって、中立無色の歴史書ではないというのです。ここから「福音書の中にイエスの生涯の姿を求めるのは殆ど不可能である」というブルトマンの発言も出てくるわけです。福音書を信仰の書、告白の書と見たことは全くすばらしい発見でした。それは正に「聖書の語ること」を聞こうとする態度に他ならないからです。所がこの「傾向」なるものを消していけばその傾向を生んだ原始教団の状況そのものに達するのではないか、という考えから過去へさかのぼって分析的に史実を求めようとする動きが出て来ました。それに対してむしろその傾向性を重んじ、伝承が福音書にまで成長するときに働いた福音書記者の神学的意図を汲みとることに解釈の意味を見出す動きが生れました。史実がどうであったかという事より、現在の福音書がその形姿において何を訴えているかを綜合的に解明しようというわけです。これを伝承史的方法と呼びますが、ごく最近のグルントマンやマルクセン等によって進められています。私たちはこの人々の将来に注目したいと思います。

以上、聖書の解釈をめぐる三つの歴史的流れを省みますと、一は聖書を今、意味あることとして聞こうとしつつも、聖書の語ること以外の読み込みがあり、二は聖書を教養のゆるす範囲で聞くという、聖書の語ることを制限することになり、三は聖書を過去の書として扱い事実をつきとめて、それに権威を帰すべきである、という楽観的大前提に立つのですが、実はその根底にひそむ相対主義と福音の絶対性の問題は歴史主義に立つ限りどうしても解決できない問題であったのです。そしてこれは今日、聖書の実存論的解釈という形でのりこえようと試みられています。

(4)　実存論的解釈（Existential Interpretation）

即ちブルトマンが「主体性が真理である」というキェルケゴールのテーマによって、実存論的聖書解釈を提唱し、新約聖書の非神話化を唱える理由はここにあるのです（「新約聖書と神話論」山岡喜久男訳）。今から二十年前に提起されたこの問題はバルトの「ロマ書」以来の論議をかもしているということです。前にのべた「聖書が語っていること」を「今、ここで聞く」という場合、非神話化論は「今、ここで聞く」一つの聞き方なのです。非神話化論は単に現代人にあてはまるように、合理的に聖書を理解して、聖書の神話的要素を除去しようというのではありません。むしろ神話的要素を実存論的に解釈して（それは非本質的な躓きであるから）、現代人を福音のもつ本質的躓き（キリストにおける神の啓示）に直接出会わせようとする試みなのです。現代人の実証主義、相対主義にむしろ戦いを挑んでいるのです。偽りの保証に安住する人間に又、不安と絶望の人間に決断と冒険としての真理把握を訴えているのです。

しかしここに一つの問題があります。それはブルトマンが「今ここで聞く」という態勢をとりながら、「聖書が語っていること」に関しては依然として歴史的分析的結論に立っていることです。彼が彼なりにふるい分けたイエスの言葉と思われるものに「聞く」ことが彼にとって解釈になるのです。それはしかし彼なりにふるい分け

に見えました。シュトラウスは神話論とともに新しい歴史観をもって、正統主義と自然主義に対抗しようとしました。かくてイエスの事実よりは、弟子達がイエスに托して表現しようとした神学的哲学的理念を、イエス時代の神話的表象から救い出すことが大切であるとして、イエスの事実よりは、イエスに具体化された弟子達の理念が重んぜられることになりました。宗教的理念は絶対精神として常に普遍であるからです。バウルやシュトラウスを中心とする解釈の立場をチュービンゲン学派と呼んでいますが、この立場はこれこそ真のイエスと叫びながら、時代の子として、その時の哲学的大前提のもとにあることに気付かなかったのです。彼らの後に旧約聖書学を中心とするウェルハウゼン学派が起りましたが、その哲学的解釈とは別に聖書の本文批評についての方法は高く評価され、新約の分野でも影響を及ぼしました。

c、一九世紀は科学の時代だ、といわれますが、進化論の提唱や中近東の探険、外国伝道による他宗教との接触等が、原始宗教の研究を盛にし、キリスト教との比較研究が行われるようになりました。かくして原始宗教から最高宗教へと宗教も又進歩発展すると考えられたわけです。ゲッチンゲン大学のリッチル（Ritschl 1822〜89）を祖として生れたのが宗教史学派でした。元来はキリスト教の優越性の弁証のために用いられた宗教史的方法は、逆にキリスト教の相対性を実証する結果になりました。聖書の記事の多くが、ローマの密儀宗教と関係があったり、グノーシス主義の神話の借り物であったり、バビロニヤの洪水神話やエジプトの民話の影響であったりするのですから、聖書の使信の独自性というものは諸宗教の伝承に分裂解体してしまうわけです。何とかしてこれを救おうとして、たとえばハルナック（Harnack 1851〜1930）等は、遠くカントの影響とともにその師リッチルの「神の支配を、キリストを通して人間の倫理的組織化に直接役立てること」という命題を踏襲して、聖書を倫理的に解釈しました。即ち、新約聖書にはイエスの、父なる神、神の国の福音と、パウロの、罪の贖いの福音との、「二重の福音」があることを指摘して、イエスの倫理的教訓こそ、「キリスト教の本質」であるとしました。ヴレーデ（Wrede 1859〜1906）の如きは「イエスかパウロか」の二者択一という問を出すに至りました。この解釈は、チュービンゲン学派が絶対精神によってキリスト教を弁明しようとしたのに対して、倫理主義によってそれをしようとしました。これもやはり聖書の無前提的、客観的歴史研究を標榜しながら、実は時代の関心の「読み込み」であったわけです。この歴史的相対主義と福音の絶対性の問題で教義学者として最後まで苦しんだ巨人がトレルチ（Troeltsch 1865〜1923）でした。

d、前述のバルトの「ロマ書」と殆ど時を同じくしてシュミット、ディベリウス、ブルトマン等が相次いで福音書の様式史的批判を提唱しました。これはすでにグンケル（Gunkel 1862〜1932）によって創世記注釈に用いられた方法ですが、一八三五年ラッハマンによって提起された福音書二史料説（マタイとルカはマルコ伝とイエスの語録との二史料を用いて各自の福音書を編んだという説）を補って、史料となった伝承以前に、又以外になお口伝があることと、史料の成立と、その福音書への編纂に至って、特別の信仰的関心が決定的に支配していること等を、文体分析から跡づけました。つまり、諸宗教の宗教文学が成立する場合に一定の様式を踏んでいることに着目して、福音書の場合も又それに従っていることを判断いたしま

聖書―歴史・啓示・霊感―

J・リーガン



聖書と歴史、啓示、霊感の関係を論ずるにあたり「歴史」ということばが聖書との関係で用いられる場合には、客観的に記述された歴史や実証論的な歴史を意味しているのではないという事をまず認める必要がある。実際最近の新約聖書研究のなした貢献の一つは、新約聖書というものは、無目的で前提を持たないという意味では客観的でない、という事を認めた点にある。

新約聖書が、いわゆる客観的な歴史を含まないとか、それを述べていないという時、我々はその著者たちが、イエスが主でありキリストであることを信じていたからこそ彼等の文書の中で客観的でなかったのだということ、つまり彼等が信仰という観点から書いたのだという事を認めているのである。我々はまた著者たちが単に知らせることだけを願ったのではなくして「……あなたがたが、イエスは神の子・キリストであると信じるためであり、またそう信じて、イエスの名によって命を得るため」(ヨハネ・二〇、三一)に聖書を書いたのであることを知っている。

本論では、歴史的出来事、即ちこの地上に起った出来事と、神の啓示との関係を明らかにしてみたい。歴史とキリスト教信仰の関係を示すために、聖書に記されている三つの出来事をとり上げてみよう。勿論聖書には啓示として釈き明されるずっと多くの出来ごとが述べられてはいる。しかしさしあたり三つの最も重要な出来事を、この限られた論議の中でとり上げてみよう。なお、聖書における啓示がすべて歴史的事件の直接的な解明として示されるのではないことをつけ加えておかねばならない。

(一)

旧約聖書における中心的出来事は、何といっても、エジプトからイスラエル人が救い出されたことである。この出来事は、かつてア

たものである以上、「聖書の語ること」ではなくなるのです。こゝで私たちはどうしても、正典としての聖書から「聞く」という最初の問題に帰らねばなりません。

(5) 正典的解釈 (Canonical Interpretation)

この解釈は正しい歴史的解釈を決して否定するものではなく、むしろそれを補助的な方法として前提しているのです。この解釈は三つの段階に区分されます。

a、「聖書の語ること」を聞くためには先づ個々の文章の意味を文法的に明確にしなければなりません。その場合、その語句、文章に関する歴史的知識が豊かであるのが望ましいのは当然です。更に個々の書物の語ることを明らかにしなければなりません。そのためには、伝承史的方法等が極めて有用なものとなるでしょう。次いでその個性的な各書物が他との関係の中で何をいっているかを汲みとるべきです。この各書物間の関係に見られる「思想的個性」に着目するのがこの解釈の特色です。

b、こうして見ますと「思想的個性を担った各書物はそれぞれちがった角度で、しかし一つの事を語っているのに気がつきます。それは「イエスはキリストである」という証言であり、同時にキリストへと向い（旧約）、キリストから発する（新約）所の神の救いの歴史であります。これは信仰による歴史の解釈であって、キリスト証言と共に聖書全巻を貫く根本的な統一的メッセージです。これが聖書のいゝたいこと」ですし「聖書の語ること」なのです。

c、さてこの明らかにされた「聖書の語ること」に即して、「今こゝで聞く」ということが行われなければなりません。今、こゝという人間の状況の全問題を背負って、聖書と対話するのです。これが常に続けられるとき、その都度「神の言葉」となる正典としての聖書によって、時代を生き抜き、自由の証人としての生を全うすることができるでしょう。

冗長な文章になりましたが、なお「聖書をどう読むか」という問題に少しでも関心を持ちつゞけてください。若き兄弟姉妹のために祈りつゝ。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ四ノ四）

「聖書解釈」について次のような書物が参考になります。

渡辺善太　聖書論第一巻正典論　新教
〃　聖書論第二巻解釈論　〃
岡村民子　正典としての聖書　教団
高柳伊三郎　イエス伝研究　新教
熊野義孝　現代の神学（絶版）　新生堂
北森嘉蔵　今日の神学　アテネ
バックハウス　現代の神学（倉松訳）　新教
シュワイツァー　イエス伝研究史　白水社
ブルトマン　キリストと神話（小黒・山岡訳）　新教
ブルトマン　新約聖書と神話論（山岡訳）　新教
The Interpretor's Bible Vol. I.
G. Kümmel, Das Neue Testament, Geschichte der Erforschung seiner Probleme

（日本基督教団中崎桜本教会伝道師）

等の耳がふさがれていたからである。

神の本質と意志が啓示されているもう一つの歴史的事件は、イエスの生涯、その業、死、復活、及び昇天である。この出来事もまた、その時代のすべての人々の眼に神からの啓示とうつったわけではない。むしろ逆に、片田舎町ナザレの人イエスは、賤しい人々の仲間だとか、気違いだとか、ローマに反逆する人々の首領であるとか、さまざまにいわれていた。丁度今日、彼がしば〳〵、偉大な宗教的指導者とみなされているのと同じである。「神はキリストにおいて、世を御自分に和解させ給うた」ことを信じない人々にとっては、イエス・キリストの歴史の中への降臨は、断じて歴史における神の啓示とはならない。イエスの生涯を形づくっている単なる事件そのものに対する固有の理解（解釈）をはなれては—そしてそれこそがキリスト者にとっては、神の最高の啓示なのであるが—啓示は存在しないのである。

更に、歴史的啓示、或は歴史的な出来事を通しての啓示の例を、もう一つとり上げて、「教会の誕生」—教会に力強い聖霊が与えられた事件—のことを考えてみよう。この出来事は、使徒行伝二章に記されておりペテロによって、その説教の中で説明されている。

この事件は、自分の体験に基いてそれを書いた人たちにとっても、非常に表現のむつかしい事件であった。実際に起った事柄を描写する言葉の足りないことはさておき、教会はこの出来事を主の約束し給うた聖霊が教会に与えられたのであると説明している。

勿論この出来事に、もっと異った解釈を加えることもできる。この出来事の一部分をみた人が、この事態を「酒飲みたちが、朝っぱらから、酔って大騒ぎをしていたのだ」といったことは、聖書にも記されている。

この様に同じ事件が、異った証人たちによって、それぞれ異った解釈を与えられている。ある人が酔った人たちの喧噪としてのべたことを、ペテロは、約束の聖霊の降臨であると宣言したのであった。

歴史の中に起った以上三つの事件のそれぞれにおいて教会は、神の働きをみ、神の啓示を受けとるのである。これらの出来事の何れについても、異った解釈が成立する。何故なら、ある証人にとって、これらの出来事は、神の啓示であり、ある証人によっては、そうでないからである。

同じ事件を、ある人たちは神の啓示とみ、ある人はそう考えないのは何故かという疑問に対して、教会が伝統的に与えてきている説明は、「神を認識することは、神の民の一員となり、或いはなろうとしている人々にとってのみ可能である」ということである。並でもこれらの出来事を、啓示としてうけいれるためには、先ず神の家族——教会の一員であって、そこで聖霊の導きをうけねばならない。歴史上の事件が、啓示をもたらすものとなるためには、神の聖霊が、その事件の意味を解き明さなくてはならない。いいかえれば、霊感が存在しなくてはならない。霊感のある時にはじめて、これら歴史上の事件が、神の本質をあらわすものとなるのである。

更に我々は、一つの事件が、神の本質について一つと限らず多くの面を示すことを認める必要がある。出エジプトという歴史的事件が、神の本質の、より深い認識を与える啓示として、一人の予言者によって、再解釈されている事実を、我々はホセア（一一章）にみ

ブラハム、イサク、ヤコブに語りかけ、モーセにあらわれ給うたその神の啓示としてイスラエル人にうけとられた。この出来事において、神は、歴史の中に、現実の世界の中に働き給う力をもった神として、御自身を示された。

神は、御自身の目的を成就するために、この地上の生活の中に働き給うた。

神は、大風を起し、紅海の水を動かした。

そしてまさにそれがイスラエルの民の救いをもたらしたのであった。この出来ごとは、神の御性質のある一面を示している。

たしかにこの出来ごとは、旧約聖書全体の中で、最もしばしば引用され、言及される事件ではあるが、しかし単なる事件そのものは、啓示でも何でもないのである。何故ならこの出来事に対する解釈や特別な理解を離れては、それは、単に、脱出途上にあったイスラエル人にとって、まことに都合のよい時に、大風がおこって水がせきとめられ、エジプト人にとって全く都合のわるい時に風が吹きやんだという事件である。事件そのものは、神について、何事も顕わしはしないのである。

しかし、聖書において解き明かされ、意味づけられたこの同じ事件は、昔も今も神の本質と目的について、更に、神の民を、みじめな奴隷の生活から救い出して、この世に対する祝福の器となし給う神のちからについて、語りつづけているのである。

この「歴史的」事件こそ、旧約の予言者たちが、神の民に対する神の愛、摂理、又予言者が語っているそれの時代々々に働き給う神の力の一例として、つねにとり上げている事件なのである。

この事件を解釈したよい例は、イザヤ書五一章であろう。

イザヤはここで、何十年も前に母国からつれて来られ、今はバビロンに捕われているイスラエルの人々をなぐさめている。捕囚の生活の中にもなお神は、彼らイスラエル人とともにいまし、やがて彼らを再び救い給うであろうことを告げようとしている

神が彼の民を再び救い給うということの確証として、イザヤは、昔、神がその救いの力をあらわし給うた時の紅海におけるあの最初の偉大な出来事をおもい返して語るのである。

「わが義はすみやかに近づき
わが救は出て行った。
わが腕はもろもろの民を治める……

「主のかいなよ、
さめよ、さめよ、力をみよ。
さめて、いにしえの日、昔の代にあったようになれ……

「海をかわかし、大いなる淵の水をかわかしまた海の深き所を
あがなわれた者の過ぎる道とされたのはあなたではなかったか

このことは真実なのだ、それ故にと、イザヤは未来に関して、人々に語りきかせる。

「主にあがなわれた者は、
歌いつつ、シオンに帰ってくる。

しかし一方、出エジプトの事件において、エジプト人に対しては、神の力と愛とはあらわされなかった。彼等の眼は閉ざされ、彼

る。過去の歴史的事件にふれつゝ、神について語っている記事はすべて、その記者、或いは語り手が、過去の出来事を彼ら自身の時代の光にてらして深く考え、聖霊がそれを導いた結果、うまれたものである。啓示はこれらの出来事の中にはじめから存在した、しかし歴史上の事件は、予言者が神の霊に導かれ、神がそれらの出来事を通して語り給うというかたちで、その時代の人々の状況との関りにおいて、新に解き明され、説明された時、はじめてはっきりと、啓示として認められるのである。たとえば既に引用したイザヤ書五一章がその例である。

(三)

聖霊はまた、予言者が民に語ったときばかりでなく、聖書の記者たちが、これらの歴史的事件を記述した際にも、彼らの導き手であった。聖書の記述は、ふつう、テモテへの第二の手紙三章十六節の「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって……」という言葉に基いて、聖書の霊感とよばれている。勿論、テモテへの手紙の記者は、聖書が神の霊感によって書かれたというとき、旧約聖書を指しているわけであるが、基督教会は、新約聖書も又、神の霊感によって書かれたことを信じているのである。教会は常に、神が、聖書の記者たちに霊感を与えてそれを書くように導いたという事実をうけいれて来た。しかし、神が、どのように記者たちを導いたかを説明しようとした時、それは決して容易ではなかった。その説明はまちまちであって、聖書の一語一語を神が口述されたとする人々もあれば、丁度小説家が執筆する際の霊感に極めて近い形で、神の霊感が与えられたのだという人々もある。

しかしながら、普通与えられている説明は、聖書記者たちは、神の霊以外の何物によって導かれたのでもないということである。彼らは、歴史上の事件を記録し、解釈する言葉を記した。例えばパウロが、ガラテヤの教会に向って、ペンテコステ——教会に聖霊が注がれた事件——の意味を解き明したとき、(ガラテヤ五・二二—二三)彼は、その時代の、ガラテヤの町の人々の生活における聖霊の働きについて、述べているのである。使徒行伝二章の出来事に直接ふれてはいないが、パウロは、その事件が、そこに参与していた人々の問題と生活に、如何なる関わりをもっていたかを語っている。パウロは使徒行伝二章に記されているような神の霊は、それをうけた人人の生活に、直接関わるものである筈だという。聖霊をうけた人々は、愛、よろこび、平和、寛容、なさけ、善良、忠信、柔和、節制の生活を知るであろう、と。

パウロをして、ペンテコステの出来事をこのように理解させ、このように記述させたのは、聖霊の働きであった。これらの言葉の一つ一つを、神がどのようにしてパウロのうちに宿らせ給うたかを、我々が説明することはできない。もし、神がそれを我々に知らせる必要があると思われたならば、それは聖書の中で我々に語られたはずだと私は思う。

(四)

キリスト教が、歴史的宗教、即ち、神の本質と意志を、歴史上の事件の解釈の中に見出してゆく宗教であるというならば、何故、ある人々はその事件についての解釈を読んでこれを信じ、ある人々は信じないのであろうか。そもそも何故、目撃者たち自身がそれぞれ異った解釈を与えているのであろうか

今日これらの出来事について書かれた聖書を読んで、ある人は信

ることができる。

「私はイスラエルの幼い時、これを愛した。わたしはわが子をエジプトから呼びだした」

ホセアは出エジプトという、単なる歴史的事実そのものについて述べながら、しかもここではそれを、愛の故にその子イスラエルを救い出す、神の働きとしてみているのである。ホセアによれば、この事件は「神の力」と共に、「神の愛」を示すものであった。これら三つの歴史的事件はすべて、神の行為としても説明され得るが、同時にそれらを、(1)気圧の変化、(2)死后外国人によってその偉大さを認識された人物の生涯、(3)酩酊の一例、であるというように説明することも又容易である。

これらの出来事を直接見た人々自身が、さまざまの立場からそれをみている。ある人は啓示を受けとり、ある人はそうでない。啓示を受けとるのは真理が彼等を立ち返らせたからである、云いかえれば彼らは聖霊に導かれたから、そのようなことが可能だったのだ、というのが教会の信仰なのである。

(二)

歴史的事件を見た人々の間に多くの異った解釈がある。或る人々は、これら歴史の内に起った事件のなかに、啓示をみた。

即ち、彼らは神について、この世に対する神の計画について、これらの事件を通して更に深く知るに至ったのであった。これらの事件を、神の業としてうけとった人々は、啓示をうけた。彼らは、単に抽象的な真理にとどまらず、神の意志と、神の業そのものに関わる真理を知ったのであった。

彼らは、神が、きびしい奴隷生活と多くの死から、その民を救うために働き給うたという事実を、出エジプトにみたのである。その後イスラエルの民の歴史の中のさまざまの時にあたって、人々は、聖霊の導きのもとにこの出来事を思いかえした。そして彼らにはその度毎に、神の本質についてのより深い理解が、与えられてきたのである。

神がその民を救い給うた、という事実の故に、彼らは、神を、力と愛の神として、知るに至ったのである。神はその民をひとたび救い給うた。それならば、その神は、将来の困難からも民を救い得給うはずである。何の怖れるところがあろう。更に聖書記者達は、歴史における他の事件を通して、神がその民を救い給うた事実を伝えている。過去において、多くの困難からその民を救い給うた神を知る故に、イスラエルの人々は、現実の不幸な境遇からの救いをこえて、より完全な救い、即ち、民がすべて神の意志に従い、すべての国々が、神を知り神に仕える時の来るのを、待ち望むようになった。このように、より完全な、より広範な救いを将来に待ち望む態度から、イスラエルにおけるメシアへの待望が生れたのである。そしてこのメシア待望は、イスラエル人が、聖霊の導きのもとに出エジプト及びその他の事件を通して与えられた啓示に深く思いをひそめ、彼ら自身の国家的、個人的生活における問題を、その啓示の光にてらして考えることをつゞけてゆく間に、ます〳〵深くたしかなものとなって行ったのであった。詩篇の記者が出エジプトの事件を見、神のゆたかな救いの業の数々を思い、そして、神のひたすらなる愛について記したとき、その時我々は、「神の深い愛についての認識が、歴史を通して彼に啓示された」というのである。歴史上の事件についての彼の認識が、神の霊の導きによることは勿論であ



聖書のグループ研究の意義と方法に関して

布施濤雄

グループ研究という形をとって学生諸君と共に聖書を学んで来たが、最近その方法に関して種々と問題を感じる。「何を―聖書は私達に語ろうとしているかに興味を持っているわけだし、それに対して持ちすぎるということは決して言えないが、その結果、「如何に」して、聖書に全く関心を寄せない人々をも含めた方々に「何を」を伝えていこうとする努力を怠っていることか。一方では世の心ある人々をして「〈How to〉ものの氾濫せる現代」と嘆かせているのを聞き乍ら、然も、グループ聖書研究の責任の一端を担っている私達が、その方法に対して無関心であるということは、様々な背景を持つ参加者に対して愛を欠くのみならず、「何を」という事柄が、その参加者一人一人とかゝわっていることを思う時、「何を」に対する私達の不誠実さのあらわれであると反省せずには居れない。

そこで最初に具体的な二つの立場を考えてみよう。一つは敬虔主義者の立場であり、他の一つは自由主義神学者の立場である。前者の場合、泥くさい現実から逃避して、自分達の世界を造りあげ、そこで志を同じくする者と共に聖書を学びつゝ讃美と感謝の生活を送る。現代に於けるその例をドイツのある敬虔主義者達の群れに見出すことが出来るが、ナチ政権の下では聖書研究の中に逃避して、それに対して責任を負って行こうとしなかった。所が後者は、聖書の中に諸々の真理のあることを発見するのに貢献したが、然しそのために、それによって聖書が立っている筈の真理を犠牲にして了ったのではないだろうか。聖書研究に於ても、自分の理性で到達しえたものをそこに読み込んで行こうとし、従って好ましくないものを切り捨てゝ行くという結果になって了った。聖書の真のメッセージをきくために聖書の批評的研究がなされたかも知れないが、メッセージをきくひまもない程資料研究に追い廻わされ、やがてその手段が目的と化して了った。この良い例をも又私達はナチ政権下のドイツに見出すことができよう。カール・バルトによってその神学は鋭く批難されたけれども、彼等は安易なナチ礼賛に終始して了った。この二つの流れもナチ政権の下で一つになることが強いられ、ある者は地下に潜り、ある者は信仰を失ったが、然しそれを積極的に受けとることにより、ドイツに新しい生命を吹きこむ聖書研究が生まれ

じある人はそれを信じないのは何故かといえば、それは、イエスを見、イエスにきいた人々が必ずしも全部、それを神の啓示とは信じなかったという事実の背后にある理由と全く同じである。しかし、誰が、他の十二弟子と同じようにイエスの教えをきいた筈のユダの裏切りの理由を説明できよう？　ユダは、我々には解らないある理由があって聖霊の働きに対し、ペテロが応えたようには応えなかったのであった。この事実の背后にひそむ謎は、今日ある人々が聖書を読んでなお基督者にならないという理由と共通のものであろう。何故、出エジプトの出来事の中に、エジプト人は神の啓示をみなかったのか、というのも同じ質問である。更に、何故神は、エジプト人ではなくユダヤ人を、その祝福と啓示の器として選び給うたか、と問うこともできる。

そして、これらの問への答は、全く神秘に属するのである。

同じように、何故ある人々はキリストの中に神の啓示をみ、ある人々はみないのか、ということも神秘に属する。何故ユダがキリストにある神の愛をうけいれなかったかを、誰も説明できないのと同様に、何故家族の一人がキリスト者になって、その兄弟が、キリストにある神の啓示を拒むのかということについても、誰一人説明を与えることはできないのである。

結　び

歴史上の出来事を通して神の意志と本質を知ってゆく宗教であるという意味で、キリスト教は、歴史的宗教である。もしこゝでとり上げたような三つの事件が生起しなかったとしたら、聖書は謎になってしまう。屡々高く評価されるところの高貴な道徳的な教えもまた抽象的に存在するのではなく、神と神の意志が、歴史を通して、世界に示されているとの仮定の上に立っている道徳なのである。

そして、これらの出来事の説明、その意味づけ、実際の記述は、すべて神の霊感によって行われた

これらの出来事が聖書に基いて語られ、聖霊が、きくものの信仰の眼を開き給うとき、世界中の老若男女の心の中に、今日の時代における啓示が与えられるのである。

教会の使命は、この聖書、即ち神の言葉を教える事である。聖霊はそこに記されている出来事を、神の民への今日の啓示と教会形成の手段として用い給うであろう。

（日本基督教団宣教師）

（四九頁下段より続く）

生命的連帯を自覚しつゝ、全力を挙げて語り合うことが許されたことは、ひとり指導者自身にとってばかりでなく、日本のＳＣＭの今後の発展にとって、誠に意義深い協議会であったと云わなければならない。我々は協議の中で多くのゾルレンを言い合った。しかし未だ現実のものとして与えられたザインの余りにも少なかったことを想い起す。このこと自身をわれらに御国を待ち望みつゝ前進する希望と喜びを与え給う神の御こころとして喜びつゝ山を下ったのである。日本におけるＬＭＣ研究が、いよいよ深くＳＣＭと教会の現実に触れながら常に新しいパースペクティブをわれらに与え、またそれを媒介として分たれた教会の一致とＳＣＭの一致が現わされる日の来ることを切に望んで止まない。

（日本ＹＭＣＡ同盟学生部関西主事）

千年以上も時代のへだたった現代に生きるこの私達に、そしてこの私に何を語ろうとしているのか」を正しく聞きとる時、私達は始めて正しく聖書を学び、神の言をきいたことになることは今更論ずるまでもない。敬虔主義者達はこの時代から逃避し、自由主義神学に立つ人々は、そのみことばに生きることを忘れた。キルケゴールは「我が魂の戦いの中で、「みことばを学ぶことは、みことばを正しく理解し実行することである」といってるが、ヨーロッパのあるグループでは、聖書研究をした後で外に出かけ、そのみことばに即して来る一週間生活をし、帰って来てからその体験を語り合うそうだが、それが最善の方法か否かは論じないとしても、そこでは「このみことばは私に何を語るか」より、「信仰を失って了うような泥んこの生活の中で生きる私に、みことばは何を語るか」との問にかわる。

三　聖書研究の最も理想的な形態はグループでの研究である。勿論私達が歴史を繙くとき、只一人で聖書に体当りをし、神のみことばをきいた人々を見出す。刑務所や強制収容所の中で生活を強いられた人々が、なおも、たえず力強い神の言をきいたことを学ぶ。密室の祈りと共に、只一人でみことばを学ぶことの重要さを私達は充分にみとめ乍ら、然も同時にグループによる聖書研究の意義も大きいわけで、それを一、二のべてみよう。先程も少しふれたが、個人的に聖書を学ぶとき、どうしても、自分の好きな聖句を読み、きらいなものは避け、自分の主張を活かすように聖書を勝手に読んで行く傾向がある。然しグループでは夫々が夫々の考えを持っているのでこれが正されざるをえない。又例え最善の註解書を手にしながら聖書を読む場合でも、グループに於て人格的な交りを通してみことばを学ぶという特別な効果は期待出来ないだろう。内村先生が、聖書の最大の註解書はその人の人生そのものだといわれたが、グループでは限られた只一人の人生経験からみことばを学んで行くことに限られず、様々な背景を異にする人々の様々な人生経験を通しての証しがそこに期待されるだろう。今でも忘れることの出来ないグループ聖書研究は、小塩先生と「イエスの譬」を学んだことだ。先生の名声にひかれて最初の日集った学生は約六十名、そこで概論的な話を一時間程なされたが、全然つまらない、いやそれよりも何をいっておられるのかわからない。それを原稿にすれば神学雑誌にのせても恥かしくない材料がそこにもられていたのだがそれがいけなかった。第三回目の時は十数名が集ったに過ぎない。残りの人々は先生のあまりにも充実した話にはついて行けなかったのである。そこで先生と共に少数によるグループ聖書研究の方法を考えた。というのは今迄のは聖書研究という肩書きをもった聖書講演であったからである。発題者、司会者がきめられ、メンバーはテキストを良く読んでくる。〈婚宴の譬〉の際にきた、「何故礼服をつけないで出席した者が手足をしばって外の暗やみにほうり出されたのか」わからなかった。さて小塩先生が指導者としての良き資格を備えられていたとするならば、私達の疑問に一分のすきもない答を与えて下さったことではなく、忍耐をもって私達の話合いをじっときいていて下され仲々発言なされなかったことである。かくて無駄と思われる時間を費したが、たまたま一人のメンバーが手元にあった小辞典により、「富者は貧民を招くこともあって、その場合には婚宴の服を入口で貸して常着の上に羽織らせた」ということを発表し、それにより譬の中核に突入したということを、それが七、八年も前のことなのに

るにいたった。

牧師達は毎週説教の準備のために集った。只一人で説教の準備に一切を打ち込むことは、あまりにも大きな外的な圧力のために、ゆがめられる危険性があった。それに説教する際のテキストの選定一つにしても、ナチ政権は自分の側に有利な聖句集を押しつけようとした。そこで牧師達はルーテル教会の伝統に立ち、ナチの影響を受けてない古い聖句集を用い、出来るだけ古い註解書を当番が読んで来て発表し、数時間を費して様々な解釈をたゝかわし、自由主義神学の立場の人々も喜んで参加出来る様な学問的にも高いものであった。次に、聖書をそこに開いたまゝ、彼等の生きている時代の問題に議論を発展していった。現実のなまの問題をそれこそ徹底的に、厳密に分析し、それを最後迄やりぬくために、安易に聖書と現実の問題をかゝわらせない様に皆で牽制しあった。充分にその二つのことをなしとげた後に両者を関連させ、そゝに説教が生れた。こゝに自由主義神学者と敬虔主義者との持ち味がうまく生かされ、前者は聖書が現代に向って語りかけることを発見し、後者は泥にまみれた現実に積極的に生きるとき、そこで神の言を正しくきくことの出来ることを学んだ。

聖書はナチと闘うに当っての強力な武器であったが、戦後ナチの崩壊と共に全ヨーロッパにその豊かな富をわかち合うにいたった。ドイツ敗戦の混乱は様々な道徳問題を生み、農民は闇市の出現により多額の富を獲得したが他方そのためにひもじい思いをする人々も多かった。クリスチャンの農民は集って聖書を通じ如何になすべきかを学んだ。このような集会はかくて Evangelical Academy の運動にまで発展し、各県にあるアカデミーに信徒は日常生活の問題をたずさえて行き話し合った。

以上少しくドイツの事柄を学んだが、夫々の国に歴史あり、伝統あり、精神風土を異にするわけでそれに応じて聖書研究の方法もそのまゝ真似るわけにはいかぬが、然しその原則ともいうべきものを以上の例を手がかりとしながら三点にしぼって考えてみよう。

一　聖書研究は学問的であるべきだ。研究という文字を使う限り、上滑りな態度は許されず、然も聖書が私の身代りとなって死んで下さった方の遺言であることを知った時、真心こめてそれを読まずにはおれず、当然学問的に厳密に読むことが要求される。自由主義神学の立場の人々の行う原典批判、著者、背景等の批判的研究を、彼等が誤ちを犯したからといってその一切を否定することはゆるされず、それらの人々の註解書をも積極的に生かすことが必要だ。従ってこゝでは先ず出来るだけ虚心坦懐に、「聖書の著者はその当時の状況の中で、何を人々に語ろうとしたか」を学ぶのである。これを充分にやらないと、「自分の思想を聖書をして語らせる」という読み込みをやりがちだし、かといってそこに止まって了うとき、それが「聖書の時代と状況を異にする私達の時代に対して何を語るか」が見失なわれて了う。そこで第二の原理が必要となってくる。

二　聖書研究は実存的であるべきだ。或は又主体的な読み方というふうにいゝかえることもできるが、そこにはもっともらしい表現をとりながら実は勝手な解釈をする危険がたえずあるわけで、これを第一の学問的な、客観的な研究の後にもってきたのもそのことに対する警戒からだ。最近わが国に於てもこの点の重要性が認められてきたが、一特定の時代の特定の人々のために書かれた聖書が、二



韓国の呼び声

——韓国訪問より帰りて——

小　野　高　治

三月二十二日早朝、私達六名の訪韓代表をのせた九州郵船のゆたか丸（一六三トン）は、十二時間の航海を終えて、釜山の波止場に横になった。照りそめる朝日に港近くそそり立つ山々の赤茶けた肌色が、船底からはい出した私達の目にまず飛びこんできた。「ほう、皆禿山だね。」「あんな山の中腹まで家がつまってるよ。」「教会が多いな。三つ、四つ、五つ……」始めて見る韓国の景色を、こんな風に印象に留めながら上陸をまっていると、韓国側の招待母体KSCC (Korean Student Christian Counsil)の代表で、ソウルのメソジスト神学校教授、金竜玉氏が、釜山のキリスト教学生十数名と共に迎えにこられた。堅い握手、つづいて一人一人、ややはにかんだ女子学生達からカーネーションをおくられる。言葉の障害を越えて友好の心と心は早くも伝わり、何かほっとしたものが胸底にとけていった。

私達の二週間のスケデュールは全くぎっしりつまっていた。二十四日から二十七日に至る仁川の基督教学生指導者会議への参加を中心に、ソウル、大邱、釜山の各所で、様々な形での懇談会、講演会、歓迎会が開かれ、その度ごとに韓国人の、とりわけ若い人々の、日本に対する想像以上に強い関心と、私達代表に対する至れり尽せりの厚意に感動させられた。列車の中でも私達の周りには忽ち周囲の人達との会話の波が広がったし、降りる駅ではどこでも多数の基督者学生や、指導者や、新聞記者などがどっと待ちうけていた。夜は客をもてなす韓国流の習慣に従って色々の家庭に分宿したが、食事を殊の外楽しむ国柄とあって、朝から山海の珍味をどっさり盛られ、まして昼食と夕食はあちこちの団体から厚く招待され、私達の胃は国際親善の為に涙ぐましい苦闘をし

今でもつい昨日のごとく印象的に私の脳裏にきざまれている。これは神学者の講演や只一人の勉強ではえられないグループ聖書研究の大きな収獲だと信ずる。そこで具体的にグループ研究の際考慮すべきことを幾つか記してみよう。

一、指導者の問題。というとすぐ聖書研究の指導者だからメンバーよりも聖書の研究に精通している人、従って牧師か又は神学者となりがちだが果してそうであって良いのか。牧師には出来ないが信徒には出来ることがあるわけだ。それは信徒の指導者の場合神学的訓練という点に関して牧師に劣るかも知れないが、然しこの世との関連に於てはもっと強く聖書研究のメンバーと同じ立場に立って一緒に考えてゆけるという点では優れている。而も一つの教会で少数のメンバーによる聖書研究を持とうとする場合にはどうしても信徒の助けなしにはできないわけだ。勿論、そのためには牧師は細かい指導を信徒の指導者になすべきであって、気の短かい牧師は、こんなことなら自分でやった方が早いと思うかも知れない。確かに牧師は永い信仰生活と高い学問的訓練の上に興味ある話をすることもできるし、信徒も又良い話にきゝほれる傾向があるが、聖書研究は単なる講義をきくことではないことは小塩先生の例で明らかだろう。

二、メンバー構成。教育程度の差、信仰生活の長短によってグループをわけることに対しては賛否両論にわかれようが小塩先生は、求道者のためだけの聖書研究に対して反対をされながら次のようにいわれた。「信仰生活にとってのアルファこそ実はキリスト教信仰の本質にかゝわることであって、その限りでは、信仰生活を永年送っている人にとって、もう良いという問題ではない。それに信者でない人々は信者が出すのに躊躇するような問題、即ち十字架や復活の問題もわからなければわからないとはっきりいゝ、信者同志だと以心伝心という、言を媒介としないで了解して了うことも、未信者の前では通用せず、自分の信仰を一応彼等にもわかるような言でもって証することを要求される。うまみという点では牧師に劣るかも知れないが、同じグループのメンバーの語る言はとゝのえられてないだけ又訴える力も大きいといえよう。とかく論理をふりかざすインテリと、逆に体験に最後のより所をおきがちな人等、様々な人々がグループを構成する時、指導者の責任は重いと共に又収獲も多いのではないだろうか。

三、メンバーの準備。註解書を学ぶことは、使い方によっては聖書研究を掘り下げることになるが、同時に又「聖書は何を語らんとするか」ということよりも「註解書は何をいわんとしているか」ということに興味を持っていかれる危険性あり そこで当番の人はしっかりと読んでくることが願わしいが、一般のメンバーは読まないでくる方が却って良いのではなかろうか。それよりもむしろ日本語と英語の幾種類かの訳を参考にし乍ら、何しろテキストに体当りをし、疑問の所には〈?〉を、感銘を受けた所には〈!〉をつけて、グループに於てそれを発表して行く方が効果的だと思う。特に英語では Philips の私訳や最近英国で出版された The New English Bible 等は多少英語の素養のある者には大いに参考になるだろう。細い点については勿論のこと、テキストの選定、グループ研究用のガイドブック等については紙面の関係上ふれることが出来ないのは残念だが、特に参考となった一冊の小さな本を興味のある方は機会を得て読んでいただきたい。

（早稲田奉仕園主事）

E. H. Robertson: Take and Read, SCM Book Club. 1961

ともあれ我々は政府間の会談について手放しで委任状を与える事には警戒しなければならないが、然も所謂、進歩的な文筆家の一それみた事か一式の朝鮮問題の取扱い方にも不満を感ぜざるを得ない。彼等は韓国については情報たっぷりに興味ある分析をふるっているが、北鮮の実態については全く僅かな宣伝資料を鵜呑みにし、情報の単なる紹介者になつてしまう。彼等にとっては北鮮の経済的復興は目ざましく、凡てがうまく運んでいるのに比べ、韓国では絶望と頽廃のみがある。成程公平に見て北鮮の方の経済発展のテンポは、南鮮より相当急速な様であるが、それがどの様な具体的なプロセスで行われたか、急激な変革に際しては良かれ悪しかれ当然起る抵抗をどの様に処理したか、又今日の地方の民衆や生活の心情はどの様なものであるかは全然分析しようとしない。情報がないからであろうが、そのない事が気にならないらしい。それ故彼等は性急にかく診断する。死に瀕した南鮮にとっては、興りつつある北鮮の呼びかけに応えて統一を計るか、餓死を選ぶか、しかないと。又その「情報」によると、大体南北統一に反対している韓国人の多くは、北鮮の徹底した土地改革の為北鮮から逃げだした旧地主やその子弟であり、それ故にこそ北鮮に激しい敵意をもっているのだ。従って南鮮における反共は、労働者や学生の意識と関りのない小数の元特権階級の反動的な宣伝にだまされているものとみる。しかし果してそうであろうか。私が受けた圧倒的な印象では、韓国の強烈な反共は、右の様な分子を最右翼に含むにもせよ、全体としては遙かに深刻な生活体験に基いて、いわば国民感情的に沈澱しているという事である。(私はその様な沈澱を必ずしも健全なものとは思っていない事は後述する)私のホストであった黄氏も北鮮からの逃亡者であったが、彼は北鮮時代、クリスチャン一家であったばかりに受けた余りにも恐怖的な体験について語った。決して感情をむき出しにしない誠実・謙虚で温厚な氏であったが、彼の父が殺された事を語る時は、流石に怒りが燃え上る様であった。その様な悲劇的な経験談はあちこちで聞かされたし、ある信頼すべき教授は、「共産主義か餓死かどちらかを選べといえば私達体験のある者の多くは餓死を選ぶでしょう」と静かに云った。

こういうわけで、丁度西独の人々が東独からの避難民を通じて、強烈な国民的反共に固まっている様に、韓国でも例外を除けば、「自由か死か」という反共魂が、過去の体験を通して意識の深層に根を下している。だから彼等にとっては、中立無防備論の盛んな日本の知識層や労組、学生などの態度は、共産主義の実際を体験していないからそんな甘い事を言っているのだと、もどかしく見えて仕方がないらしい。全くごもっともといえる点もある。しかし又我々から見ると、韓国の反共は、過去の異常な過渡的混乱期の体験を余りにも執念的に固定化して、共産主義の下で起りつつある変化や、他方形を変えた専制や罪悪が資本主義社会の中でも同様に存在するという事実に盲目にされている様に思われるのだった。私は日本知識層の中にある観念的中立ムードの弱点をも認めたが、同時に韓国の感情的反共ムードの危険をも機会ある毎に批判し、「個人の自由」は「大衆の豊富」によって裏付けられなければ無意味になってしまう事、反共のスローガンが如何に易々と、国内矛盾の隠蔽と罪の対外転嫁にすりかえられ、権力者の腐敗を助けるかを繰返した。 (6頁下段に続く)

なければならなかった。

実際韓国の招待者側が示された暖かい配慮には感謝のみであるし、殊に釜山到着以来、金竜玉教授が私達に示された親切には頭の下るものがあったが、もし今後の交流の為に何か付け加える事を許されれば、私達は多様な国情の表裏を見聞する機会がもう少し欲しかったという事である。問題の農村の生活様式も知りたかったし、都市の失業者の実態をも知りたかった。時にはうす汚い屋台に頭を突込んで食べたり、ヤミ市をのぞいたり、要するに西洋的に洗練され、善意に満ちた基督教のグループとだけではなく、一般庶民の生活と思想にもじかに触れてみたかった。尤もこうした希望は、自分の意思による旅行でもなく、又長期間住みつく留学などとも性質の違った、短期の被招待旅行においては却って贅沢な要求なのかもしれないが。

とはいえ、私達はただ表面的な事ばかり見てきたというのでは決してない。各地での学生との共同生活を通じ、又指導者や民間人との親しい懇談を通じ又諸方の見学の機会を通じ——この見学には優雅な古都慶北の遺跡から、現代世界の対立を象徴する板門店の南北切断地点をも含んでいた——私達は容易に整理も解決もできない程の多くの知識と問題を得たし、就中こうした問題を今後日本において考え続けて行かねばならぬという課題を与えられた事は大きな賜物であった。

日韓は古代以来各種の分野で極めて深い接触をもってきたし、言語、風俗、習慣等の著しい類似は我々が気づいているより遙かに深いのであるが、今日迄我々はこの一番近い国の実情について殆ど無知と無関心であるか、偏見と誤解によって支配されてきたといってよい。尤も最近は大分違う。クーデター以来新聞で韓国の問題がとりあげられない日はないし、雑誌で韓国問題が論ぜられないものはないといってよい程、日本人の関心は高まってきている。しかしこれらの最近の関心は結局、韓国にはうっかり手を出すなという、対韓警戒心を高める方向に向って流れているといえるであろう。E・V・モメントは「朝鮮とアメリカのアジア政策」(世界七月号)という興味ある論文の中でアメリカのアジア政策は韓国を日本と共同の反共のとりでとして政治的には利用し、経済的には日本資本主義に搾取を委せる事によって日本に巨額の投資をしているアメリカ資本の利益を守ろうとすることにあると述べているが、確かにこうした危険な傾向には充分警戒しなければならないし、政府間のレベルでの急速な交渉には我々も批判を怠ってはならない。幼弱な韓国産業の中に日本資本が手放しで進出する時対韓経済援助という美名の下にどの様な経済法則が働くかは極めて明らかであるからである。ことの序でに一言するが我々は韓国に近代的な企業が殆ど成長していない事を笑ってはなるまい。日本はその統治時代、韓国民の自主的な企業家や、高度の技術者や、近代的な金融組織を下から育てる事をせず、まして農村からは搾れるだけ搾り、愚民政策をとって抑圧して来た事は周知の通りだからである。いわば韓国は全体として封建時代のまま、「解放」されてしまったのだ。その上資源的に致命的な南北分断と、史上稀な国内破壊戦争、アメリカ当局の失政、利権と政権の分前に狂奔して腐敗した前近代的政治家、官僚群、それらを許した大衆、特に農民の無気力、など、韓国にとって不幸な内外の要因が次々にからみあって今日に至ったのだ。

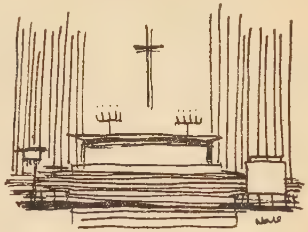
エゴイズムのとりこになり、みずからを絶対化し、主イエス・キリストにとってかわる危険をもっている。これは、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の中の「大審問官」の章がよく示している。

ＳＣＭは、このような歴史の中にある教会のもつ危険性に、たえず目を覚していたし、また現在もそうである。この点でＳＣＭは、宗教改革の原理、もしくはプロテスタンティズムの本質というものを身につけている。ＳＣＭは、歴史の中にある教会が、様々な手段によって、このような危機の中にあることを蔽いかくすことにプロテストする。また教会が、その主であるキリストを、宗教的組織体としての教会の中の一部分とし、みずからを絶対化することにプロテストする。キリストは、その体である教会のかしら、その審判者である。教会は、このような教会の超越的な中心としてのキリストによって、つねにそのエゴイズムを否定される時、すべてのものの主であるキリストの体であることを許される。教会がみずからの危機性を蔽いかくすことなく、深い淵の中にあって、ただ主イエス・キリストによって立てられてゆく時、教会はこの世にあって力がある。そして「わたしたちは、この宝を土の器の中にもっている。その測り知れない力は、神のものであって、わたしたちから出たものでないことがあらわれるためである」（コリント人への第二の手紙四・七）と告白することが出来るのである。要するにＳＣＭは、歴史の中にある教会が、すべてのものの主であるキリストの体となることによって、その宗教化、そのエゴイズムからたえず救いだされてゆくことに関心をもち、それを見守っている。そしてこのような教会のかしらであるキリストを、ＳＣＭは、その中心、その生命とするのである。

二　教会の中にあってＳＣＭをどう考えるか

ＳＣＭは、教会の主であるイエス・キリストを、その生命、その中心とする。ＳＣＭも、教会と同じ中心をもっているという意味においては、教会生活の延長ということが出来る。ＳＣＭは、キリストによる神と学生キリスト者との関係を、大学生活において現実化しようとする所にあらわれるものである。ではキリストによる神と学生キリスト者との関係を内容的に規定しているものは何であろうか。私はいま、それをアガペー（愛）、ロゴス（言）、カイロス（時）という三つの言葉で言いあらわしたいと思う。この三つによって学生の大学生活が規定される時、教会生活の延長としてのＳＣＭが展開するのである。

㈠　ＳＣＭは、神の愛、アガペーによって規定されている大学生活を実現しようとする運動である。学生キリスト者は、イエス・キリストによって与え示された神のアガペーによって、「神、ならびにキリストとの交わり」（ヨハネ第一、一・三参照）の中にいれられている。この交わりは、我と汝との間の交わりであり、人格共同体を形成せしめるものである。大学にあって、学生キリスト者は、神、ならびにキリストとの交わりを、隣人との関係に反映しようとする。そしてみずから進んで他の学生と対話し、ともに喜び、ともに苦しみ、どこまでもともに生きようとする。そしてこのような交わりによって人間疎外という事実にうちかとうとする。私は、このようなＳＣＭにおける交わりの問題を特に強調したい。何故なら現代の大学生活も、人間疎外の問題をもつことを免れ得ないからであ



学生キリスト教運動の本質と使命

宮本武之助

一　日本学生キリスト教運動の中にあって教会をどう考えるか

第二次世界大戦の後、日本学生キリスト教運動（ＳＣＭ）と教会との関係が、ＳＣＭの根本的な問題として検討された。そして「教会から教会へ」という標語がつくられたことがあった。この標語は、様々の解釈のもとに批判をうけたが、ＳＣＭの中心を教会に見出そうとするものといってよいであろう。しかし私は、ＳＣＭの中心を厳密に規定し、それは単に教会であるのでなく、教会のかしらであるキリストであると言いたい。歴史の中に存在する教会は、いうまでもなく、キリストそのものと同一視されることは出来ない。キリストは教会のかしらであり、教会はキリストの体であると言われているように、この両者は分離出来ないが、区別されねばならない。ＳＣＭの中心は、キリストの体としての教会であるというよりも、教会のかしらであるキリストである。それは、宗教的組織体としての教会ではなく、その教会の主、キリストである。

エペソ人への手紙第一章二十二節の「そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上に、かしらとして教会に与えられた」という言葉は、教会のかしらであるキリストが、万物のかしらであることを、それのみでなくキリストは、あくまでも教会のかしらであることによって世界の主であることを意味しているのではなかろうか。このような意味において、私はＳＣＭの中心であり生命であるキリストは、教会のかしらとしてのキリストであると言いたいのである。

ＳＣＭの主は、教会のかしらとしてのキリストである。そこで私はＳＣＭの中にあって、キリストの体として正しくいかされている限りの教会の重要さを最大限に認めた。それと共に、この点から歴史の中にある教会に対して真剣な批判をもちたいと思う。無教会的キリスト者の言葉をまつまでもなく、歴史の中の組織体としての教会は、つねにみずからを固定化し、様々な名目のもとにみずからを守り、保守的になる傾向をもっている。そして気づかない間に、

ら、現代の大学の中に見出される共同体、人間形成、真理探求、歴史意識に、問題、限界、危機を認め、それと対決せざるを得ないのである。現代の大学は、その本質において文化（学問）共同体であり、学問、教養による人間形成を目ざしている。大学は、この限界を越え、大学を人格共同体として基礎づけ得るもの、そして人格としての人間をつくる可能性を与える何ものかをもっているのであろうか。大学が、真理の認識を目ざしていることは言うまでもないが、現代の大学は、「主観―客観」構造をもつ真理認識の外に、「我―汝」構造をもつ真理認識を認め、現実化し得るのであろうか。大学において人間の理性能力はいかに考えられているのであろうか。理性能力が運命との関係、歴史の動きとの関係、さらにキリスト教でいう罪の事実との関係において、十分に批判されているのであろうか。大学の中に見られる政治的、社会的運動は、歴史や社会における法則的必然性の認識から促がされる自由な歴史形成のあらわれなのであろうか。永遠なるものとの関わりなしに、歴史の意味が知られ、歴史の方向づけがなされ得るのであろうか。

(二)　SCMの中にあるものは、大学生活の中にあって直面する様々な問題、限界、危機と対決しながら、教会にその宣教が托されている聖書の使信をとおし、イエス・キリストが世界の主であること、したがって大学生活においても主でいますことを信じる。そしてこのキリストとの関係において、人格としての人間と人格共同体との創造に対し、また神の啓示の真理によって照明された心に与えられる認識に対し、また「すでに」と「まだ」とが弁証法的な緊張関係をもつ歴史意識の形成可能に対して目を開かれる。しかしSCMの中にあるものは、このことによって大学生活の現実的な問題、限界、危機を直ちに乗りこえてしまうのではない。彼は、キリストを信じることによって、問題と限界をもつ大学生活に、新しい意義づけを見出すのである。一言でいえば、彼にとって大学生活は、キリストをとおして行われる神の働きかけに対する応答の生活という意味をもつのである。そして彼は、いかなる時も大学の中で、「信仰による義人」として大胆に生きるのである。

(三)　イエス・キリストへの信仰は、悪霊につかれた場合のように、大学生活を破壊するものではない。しかしSCMの中にあるものは、現実の大学生活をそのまま肯定し、それに安住するのではない。彼は、大学の中で、イエス・キリストにおける神の働きを指し示すような象徴的な生活をたたかい取るのである。彼は、教会の主であることによって世界の主であるイエス・キリストが、この主を信じるものの生活に基礎と目標とを与え、いかなる時も勇気と望みとをもって進みゆかしめることを指し示すような生き方を、大学の中にあってたたかいとるのである。これは、大学生活を浅く生きることを意味していない。むしろ目を覚まして大学生活を、その限界を知るにいたるまで深く生きること、しかもつねに慰めと望みとにみたされて生きることを意味している。

SCMの中にあるものは、このような大学生活を可能ならしめるイエス・キリストに出会うことをゆるされたものである。そしてこのことについて、もはや黙していることが出来なくなったものである。彼は、教会の宣べ伝えるイエス・キリストを、大学の中にある者にとって、なくてはならぬものとして証することを使命と感じる。そしてSCMの担い手であることに厳粛な責任を感じるのである。

（東京神学大学教授「教会の生命と使命」委員会委員長）

る。「わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」(ヨハネ第一、一・三)。このように伝道と交わりとは引きはなされ得ないものである。

㈡　SCMは、神のことば、ロゴスによって規定されている大学生活を実現しようとする運動である。学生キリスト者は、聖書が証言しているようなイエス・キリストの出来事、すなわち使徒たちが語っているようなイエス・キリストの十字架と復活との出来事をつげられ、単に教養、知識の一部としてのキリスト像を獲得するのみでなく、その心を根底からゆり動かす真理に迫られるものである。言いかえればイエス・キリストにおいて、理性的存在者である人間から応答をひきおこす神のことば、ロゴスを聞くもの、もしくは神のことばであるイエス・キリストに出会うものである。学生キリスト者は、大学生活においても、このような神のことばが真理としての権威をもつことを信じ、他とともにこの神のことばを聞こうとする。要するにSCMは、聖書の使徒的証言が、神の啓示の一部であることを認める。そしてこの聖書の研究において一種のひるがえりが生じ、神のことばが語られること、言いかえれば、イエス・キリストとの出会いがおこることを信じ期待する。SCMは、大学の中で他とともに、このようにして神のことばを聞く生活を生きようとする運動である。

㈢　SCMは、カイロスに目を開かれた大学生活を実現しようとする運動である。学生キリスト者は、すでにきたりたもうたイエス・キリストにおいて、永遠なるものが時間の中にはいってきたこと、すなわち全く新しいものが歴史の中にはいってきたこと、そして歴史の意味が究極的にあきらかになったことを認める。それと同時に学生キリスト者は、歴史がまだ完成され、その終りに達していないこと、きたりたもうキリストによって全き救いを与えられ、はじめて歴史がその目標に達することを認める。したがって学生キリスト者の歴史意識は、「すでに」と「まだ」とによって規定されている。そしてそのすべての歴史的出来事に対する評価は、「然り」と「否」とによって規定されている。それゆえ学生キリスト者は、歴史的現実の中にあって、単に絶望的になることも出来なければ、単に楽観的になることも出来ない。彼は、すでにきたり給うたキリストを信じて、ゆるがない立場をもつが、単に過去に束縛されて保守的になることは出来ない。何故なら、すでにきたりたもうたキリストは、彼が将来にむかって望みをもって進んでゆくように、彼を救ったからである。しかし彼は、単に将来に期待をかけ、革命的になるのではない。何故なら、学生キリスト者にとっては、キリストがきたりたもうたという「すでに」の意識が、現在の彼をして将に来るべきものに向わしめ、それを追い求めしめるからである。SCMは、大学の中でこのような前向きの姿勢をとって生きようとする運動である。

三　SCMの中にあって大学生活をいかに生きるか

㈠　SCMは、大学の中にあって、神のアガペーによって基礎づけられた交わり、神のロゴスにもとづけられた「出会いの真理」、カイロスによって与えられる歴史意識に生きようとする学生キリスト者の運動である。SCMの中にあるものは、このような立場か

本のＳＣＭにとってこの一年は実に貴重な体験と成果とを収めた一年であった。

一方ＳＣＭの指導者、教職者を中心とする日本におけるＬＭＣの動向は如何であったろうか。ＬＭＣを日本の状況の中に如何に受けとめるかという過渡期段階を既に経過し、ＬＭＣも新たなるパースペクティブをもって、いかに日本の現実の問題に切り込んでゆくかという土着化の段階に移りつゝ過ぎた一年ではなかったろうか。

このような時に、ＬＭＣＣは第二回「教会の生命と使命—指導者協議会開催を企画し、「学生キリスト教運動の本質と使命—と主題し、(1)学生キリスト教運動における聖書研究 (2)学生伝道 (3)大学問題 (4)学生キリスト教運動と政治・経済・社会の諸問題 の四つのテーマを挙げて、ＳＣＭに連なる指導者として、学生たちの捉えたこれらの問題を更に指導者の立場から研究討議し、ＳＣＭ運動前進のために寄与せんとしたことは、まことに適切な企画であった。時あたかも生気に充つる二月二十八日〜三月二日、若葉もえ出ずる伊豆山中、天城山荘において開かれ、参加者六十余名。

更にわれわれは、この第二回ＬＭＣ指導者協議会に特筆すべき一つの出来事を記録しなければならない。終戦この方十数年、互いに裂かれた日韓両国のＳＣＭが、なお強く主の執り成しを信じて祈りの中に互いの友情と信頼を深めつゝ、両国の和解のために祈り求めてきたのであったが、その祈りが応えられて、この春日本のＳＣＭ訪問のためにはるばる韓国より来日された二人の韓国ＳＣＭの指導者 Kim Yong Ok (Chairman of KSCC), Oh Hyun Ja (Ewha. Univ Counsellor) 及び一人の大学教授 Jung Kwang Sup (Prof. of Kyung Gi College) の三氏をこの協議会に迎え、親しき主にある交りの中にこの三日間を共に過ごし、互いの経験と問題を分ち合うことのなし得たことである。

以下はこの協議会の記録の要約である。諸々の事情で十分に意を尽すことのでき得なかったことをお許しいたゞきつゝ、順を追って記すこととする。一九六一年二月二十八日午後二時、チャプレン渡辺信夫牧師の司式する開会礼拝によって協議会は始められた。

第一回協議会

開会礼拝のあと、第一回の協議会は「学生キリスト教運動の本質と使命—と題する宮本武之助氏の主題講演によって始まった。

宮本氏は第一に、戦後における日本の学生キリスト教運動がその本質的性格として「教会から教会へ」なる標語をかゝげたとき、それは如何なる意味内容をそこに表現せんとしたかを明らかにされた。即ちＳＣＭの中心、主は、教会のかしらなるキリストにあるということ——その意味ではＳＣＭは常に危機的な存在であることを云い表わしたのである。しかしこの教会とはキリストの体として正しく生かされている限りの教会であって、歴史の中にある教会は常に自己の固定化、絶対化におちいる危険性をもっている。ＳＣＭは歴史の中の教会のこのような危険性に対して常に目覚めていたのであり、常にそのことにプロテストしてきたのである。第二にＳＣＭは、キリストを自己の生命、中心とする限りにおいて、ＳＣＭも教会生活であると云うことができる。即ちＳＣＭは大学において神のアガペー、ロゴス、カイロスによって規定された教会生活である。ＳＣＭは神のアガペーに生かされる故に、大学で出会うすべての隣人とすゝんで対話し、呼応し、重荷を負い合って、彼らをＳＣＭの交りの中に入れてゆ

学生キリスト教運動の本質と使命

——第二回教会の生命と使命指導者協議会報告——

後藤邦夫

はじめに

第一回「教会の生命と使命」指導者協議会が早咲きの桜のほころび、煙たなびく大島を海の彼方に眺めて伊豆の片瀬海岸、南海ホテルで開催されてから、はや一年の歳月が流れた。

この間世界状勢の大きく揺れ動く中で、わが日本においても安保問題をめぐって戦後未曾有の試練の時を経過した。特にこの問題に如何にかゝわるかの態度決定をせまられた日本のキリスト教界にとっては、まさに重大な試練の時でなくて何であったろうか。わがSCMにおいてもまた例外ではなかった。この時期を一つの契機として、日本のSCMはその根底において著しい体質の変化をみせようとしている。各地で開催された学Y連盟夏季学校、東山荘の全国夏季学校・カンファレンス合同集会等々では、安保の問題についての一連の問題を討議し合うことが一つの大きな関心であった。「君の学Yでは安保にどのように関わったか、その根拠は、その態度は果して正しかったか」と我々は互いに問い合った。まさに歴史的な数々の体験と問題を与えられたわがSCMの主にある兄弟姉妹たちも、夏が過ぎて再び平静をとり戻した学園に帰った。SCMは再び通常の活動をはじめたが、その中でこれらの体験と問題を整理反省しつゝ、われわれは今年一月、大阪・藤沢会館に開催された学生YMCA・YWCA合同初の学Y全国学生委員会に臨んだのである。そしてこの全国学生委員会も、単に組織的な意味においてばかりでなく、内容そのものにおいて、まさに画期的な出来事であった。われわれはこの集会において、われらの先達の遺した大いなる遺産を受け継ぎつゝ、われらの現在直面する問題と現状とを分析し、SCMの将来を見通しつゝ、SCMの中心問題としての四つの立場を確認した。即ち「SCMにおける聖書研究」「学生伝道」「大学におけるキリスト者共同体の意義と使命（大学問題）」「政治・社会問題に対するSCMの関心態度」がそれである。この三日間にわたる会議の画期的な成果は莫大な記録に収められ、各方面からの評価を得た。わが日

であって、そこにSCMの固有の課題があるのである。それが如何に一元化され得るか、大きな課題を残しながら第一回の協議を終了した。

第二回協議会

第二回協議会は「SCMにおける聖書研究」のテーマで北森嘉蔵氏の発題により始められた。北森氏は先ずLMCCのこれまでの研究方法と経過についての説明を行った後、一月に開催された学Y全国学生委員会の記録に基いて全国のSCMにおける聖書研究の現状問題点を指摘しつゝ、特に学Yの生活、活動の中に聖書研究が柱として中心的位置をもち得るよう努力し、且つまた信仰的契機と現実的契機との相互媒介的統一を求めたい、という報告を評価された。氏はそしてこの問題に対して次の如く見解を述べられた。パスカルにデカルトが包まれるというが、実は包まれるデカルトに問題があるのである。パスカルとデカルトとは互いに相容れない本質があるのであって、そこには絶えず分裂する二元化のきびしさがある。そのきびしさを十分に踏まえながら、そこにおいて一元化を求めなければならない。「キリストは教会の主であり給う」とO・クルマンが云うとき、教会と世界とは、いわば同心円になる。しかしなお、そこには問題が残るのではなかろうか。確かにキリストは教会の主であり給うと同時に世界の主で在し給う。しかし教会と世界とは互いに矛盾する性格をもつのである。世界を厳しく審きつゝ世界を包むのである。ヨハネ伝十章十六の「他のひつじ」、この囲いにはいない他のひつじがいるのであって、キリストはこの「他のひつじ」のキリストでも在し給う。しかしそれは「今は一つではないが、一つになるであろう」であって、キリストに包まれてはいるが、やはり他という面が厳然としてあるのである。つまり聖書研究を通しての出会いの真理が現実の生活の中に直ちに生きるということはないが、SCMはなお執ようにこの問題に取り組んでゆくところにSCMの固有の仕事があることを指摘された。

協議はこのSCMの固有の仕事の重要さを確かめつゝすゝめられた。信仰が現実的契機の媒介を必要とするとき、われわれはファンダメンタルな信仰との対決を意味している。信仰的契機と現実的契機が正しく契機関係として成り立たず、いずれか一方が欠けてもSCMは生きてこない。これは単に学生キリスト者個人の問題としてばかりでなく、SCM全体の歴史に関わることでもある。また学Yの中でもYMの夏季学校とYWのカンファレンスの聖研は歴史的にその性格において対照的である。前者はクリティカルであるに対して後者はデボーショナルな特色があったのではないか。この両者が正しく媒介し合うような聖研を生み出さないとYM・YW合同の夏季学校は生きてこないのではないか。今後のSCMの聖研に重要な指針が与えられてこの協議会は終った。

第三回協議会

第三回協議会は以上の協議から更に発展して「SCMと政治、経済、社会の諸問題」というテーマで行われ、工藤英一氏が発題をされた。工藤氏は先ず昭和初年のSCMが、当時稍々顕著に現われ出した資本主義の矛盾による社会の様々な問題に目をつぶることができず、当時の教会の大勢を占めていた個の救い、或いは共同体としての教会の救いに飽き足らなくなった教会の青年、指導者たちが、「社会の救い」を前面に押し出していってS

く。今日の大学における人間疎外の問題に対して、SCMがそこに切り込んでゆくべき特別の使命をもっているのではあるまいか。またSCMは特に聖書研究を通して真に神のロゴスに出会い、生かされる故に、この出会いの真理を大学にあるすべての隣人と共に生きようとする教会生活である。神のロゴスは大学の理性の立場に立つ真理探求を否定するものでなく、むしろかゝる理性を真に基礎づけるものである。更にSCMはカイロスに目を開かれた大学生活である。即ちSCMの歴史意識は「既に」と「未だ」に基礎づけられる故に、SCMの社会・政治的諸問題に対しては単なる保守主義にもまた単なる革命絶対主義にもならない。SCMはこの「既に」に基礎づけられて来り給うキリストを待ち望みつゝ、歴史に対して「未だ」来らぬ将来に対して常に前向きの姿勢、歩みをなすものである。SCMが大学にあってこのような教会生活をなすものであるならば、SCMは現在大学の中にあってどのように生きるであろうか。SCMは神のアガペーに基礎づけられて、大学における機能的人間形成を批判しつゝ、更に進んで信仰による人間創造を大学の中で祈り求め大学の中に具体化してゆく課題と、大学において獲得される学問の真理の知識が更に神のロゴスに基礎づけられた知慮にまで高められることを求めるのである。そしてSCMはカイロスの歴史意識に目覚めて、大学における学生、団体の保守主義、革命絶対主義に対決してゆかなければならないことを強調された。

協議に入り、まずSCMの主は教会のかしらなるキリストであることを確認しつゝ、歴史的にSCMは真にキリストに立ちつゝ教会のエゴイズムを批判してきたのであるかとSCMの歴史をたどりつゝその基盤を検討し、教会の常におちいり易い宗教化、カトリック化に対してSCMが歴史的に宗教改革者的プロテスタンティズムの精神をもつて常にプロテストし警告を発して来たことの神学的意味とその役割を改めて認識し、教会の絶えざる更新のためにSCMがいよいよその使命の重大さを自覚して歴史を歩まれんことが期待された。しかし一方SCM自身も常に自己保存的エゴイズムに陥る危険性を同時にもつものであり、この点の指摘も重要であった

この協議会においては神のロゴスとの出会いの真理と大学における理性的学問真理探求との関係に討議が集中された。人間の理性が神のロゴス、啓示の光に照らされて否定され更に新たに基礎づけられて、学問の真理探求が更に深い次元においてなさしめられるということは原理的には理解できたとしても、現実には両者が極度に二元的に分裂している悩みをもっている。これが現実に如何に媒介統一的に一元化され得るのか、という教授、学生の問いは真剣であった。そして更にSCM、がこのような深い洞察をもって、SCMの交りを大学の中におしひろめてゆかなければならない使命を自覚しつゝも、勉強に時間をとればとる程、他の学生との交りのチャンネルが切れてゆかざるを得ないという学生の悩みにはリアリティがある。しかも原理的に「教会から遣わされて大学へ」といっても、現実に教会が教会たり得ないとき、教会は学生をして強く大学生活に押し出すバイタリティを欠く。そこでは教会生活と学生生活とが二元化し、どちらか一方を捨てるようになってしまうという学生の現実からの声に教会は十分に耳を傾けなければならないであろう。ともかく大学に生きるキリスト者はこの深刻な二元化に耐えつゝ、自己の生活の中で闘いながらその統一を求めてゆかなければならないの

問題があるかを次の如く語られた。第一に、それは信仰の主体と学問の対象としての客体との関係である。人文、社会科学系の人達は極めて直接的客体に対して影響を及ぼすものとして、学問主体の信仰の影響をとりあげられるかも知れないが、自然科学においては主体自身がキリスト者であることにおいて、固有なかたちでどれだけ本来的な影響を客体に与え得るかということは非常な問題を含む問題であり、ニュートンの力学ではそれは全く不可能なことであろ。第二に、しかし現代の科学においては客体の非客観化性ということが言われ得るように、主体と客体との関係を必ずしも明確に断ち切れるものでなくなった。しかしこの場合にもあくまでもそれは観測主体としてであって、人格主体のそれではないことに重要な問題がある。ヨーロッパにおいて科学は主体と客体とのきびしい対立を前提として、ヨーロッパに極めて固有なかたちで科学は成立してきたのであるが、自然に調和する主体としての日本人にとって、かゝる主体と客体との対立にどれだけ実感としてその必然性をもつものであろうか。しかしながら、かゝる問題に真剣に関わることに、キリスト者として大学の問題に関わってゆく最も窮極的な問題があるのではなかろうか。自然科学そのものは極めて客観的なものであって、そこに主観をもちこむ余地が本来あるものなのかどうか、たしかに出来上った科学を科学として学ぶ場合、その余地は全く許されないが、自ら形成に関わる研究者の主体の世界観は、解釈の点においては必然的に入って来ざるを得ない。しかしこの場合にも、実験、他の理論との関連の中で絶えず修正、是正されてゆくのであって、そこにキリスト者としての固有な影響を科学に及ぼす必然性が本来あるものか否か、ということに重大な問題が存在する。自ら形成するのでなく、学問を専ら学ぶ段階にある学生にとっては、かゝる問題を自らの問題として主体化して問題にするということは困難なことであるかも知れない。にもかゝわらず学問をする者として最も本質的な問題がその根抵において関わっているのであると云うことを知って欲しい、と発題を終られた。

協議において小野氏は今日における大学の課題を二つの点から述べられた。即ち①今日大学はますます専門化の傾向にあり、むしろ積極的に専門化を推進してゆかなければならない。②その中で必然的に全人的人間性を失ってゆく人間を、いかに再び全人的に回復してゆくかという問題である。全般的にキリスト教主義大学においては②の方に関心が強く前面に出てくるのであるが、むしろ今日の大学においてはスペシャリゼーションを更に徹底してゆくことの方が急務なのではあるまいか。即物的な面を徹底しておし進めてゆきながら、その中で全人的なものを吸い上げてゆくことが必要である。そうでないと信仰と科学は二元化し、知的に弱いキリスト者を造りあげてゆくことになる。社会科学においては専門化の傾向にしたがって共同研究の必要が強く意識されたがら、現実にはむしろ共同研究が困難な状態にある。そこにどれだけ共同研究の意味があるかどうか問題である。絶えず全体への関心はもつが、なおそれに耐えて自分の専門に専念してゆける、専門化に十分耐え得る人間を形成してゆかなければならないのではないか。しかもその中で如何に全人的なものを回復してゆくことができるかを求めてゆくことに大学の重要なる課題のあることを強調された。更に協議はかゝる問題を大学問題の最も根底的な問題としてSCMの中

CMの運動にまで発展していった経過をたどりながら、当時の未熟なコミュニズム理論を（また当時は明治三十年代のコミュニズムに比べて倫理的にかなりルーズな性格をもっていた）SCMの中に直接的にとり入れていったために、倫理的なきびしさをもって個の救いを重視する当時の教会、神学と激しく対立し、終には不幸な終末をもって消滅せざるを得なかったその原因を分析しつゝ、今日のSCMと教会の問題について論をすゝめられた。即ち昨年の安保問題に対する教会の態度の中には、あれかこれか、というかたちでSCM当時と同じような択一的傾向が依然として存在していたのではないかとその問題を指摘し、これに対してWSCFのLMCが目指している神学の中には、これらをダイナミックに一元化してゆこうという方向をもっており、今日、日本の教会に残存する択一的態度に切り込んでゆく一つの有力な手がかりがあるのではないかと指摘された。更に工藤氏は全国学生委員会のレポートから、安保問題に対してSCMが統一した態度がとれなかった問題をとりあげ、そこに自己の信仰・判断を絶対化しないプロテスタンティズムの本質を認めつゝ、更にSCMが一つの運動として盛り上げてゆくための戦略論的配慮考察が必要なのではないかと問題を投げかけて発題を終られた。

　これに対して宮本氏は、昭和初年のSCMの場合、啓示が内在的にとらえられて学生がキリスト者として社会問題の中に直接的に介入していったが、それに対してバルト神学では社会問題から超越的になる傾向があった。今度の安保問題の場合、如何なる神学的根拠に基いてなされたのであるか、啓示との関係はどうであったかと問いを迫られた。藤森氏はこれに対して、レポートの中で、安保問題に個人で関わったか共同体として関わったかという分類をしたことに重要なる意味を含んでいるのであり、学Yの歴史の中で種々の社会的実践をなして来たにもかゝわらず、それが学Yの歴史形成、共同体形成に特別の意味をもって来なかったことに対する反省を多分にもち、個人のキリスト者がどうしたかということよりも、キリスト者が共同体としてどう関わったかということに強い関心を示していたからに他ならない。即ちSCMという共同体が単なる世俗共同体ではなく、超越的な共同体であると同時に、世俗内在的な存在として歴史の中にそれを如何に表現するかという努力がそうした問題意識として出てきていることを指摘し、北森氏はレポートからSCM（或いは教会）と世界をキリストを中心とした同心円的理解をもっていることを指摘して、それを肯定された。宮本氏はその神学的理解を認めながら、なお今後SCMの中で、この点の神学的根拠を明確にしてゆかなければならないことを強調された。

第四回協議会

　続いて第四回協議会は「大学問題」をテーマとして鳴海元氏の発題をもって始められた。われわれキリスト者が大学の中に生きるとき、われわれが関わらねばならない最も本質的な問題は何であろうか。鳴海氏は大学は真理探求の場であって、それをぬきにしては大学は本来の大学たる意味を自ら放棄するものであること、また大学は人間形成の場であるというが、それも学問追求という過程を通してはじめてそれがなされるのであって、われわれが大学の問題を問題にするとき、その最も中心的な問題は学問との関係において存在することを述べ、然らばそこには如何なる

ブな問題が学生の関心の中心であるように思われるが、これは西欧のSCMとは大きな相違である。WSCFでは「信仰とは何か」というようなかたちでは問題にしないのではないか。また日本のSCMではかなり技術的な段階に始終しているところもあり、これらもわれわれにとってはどうしても無視し得ないものである。

ディアコニアについて。聖書からみられるような活き活きした奉仕を拒むような問題がわれわれの中にはある。具体的な生活の中に積極的にかゝわらないのみならず、自己のカラの中に自らを守ることに始終してしまう。SCMの一定のプログラムに追われてこれを消化してゆくことに満足してそこにクリスチャンの類型が出てくる。先頃安保問題では社会の問題に積極的に関わってゆくという重要な経験をしたのであるが、これが偶発的な事件でなく、日常的な生活の場で具体化してゆくことにわれわれの課題がある。学Yで活躍している学生の中にはマリヤ的類型とマルタ的類型があり、また一人の人間の中でもこれが分裂して存在する。これがどのようにインテグレートされるのか。このインテグリティの回復こそわれわれの課題であると結ばれた。

続いて協議に入るが、特に大学共同体におけるキリスト者共同体の参与の仕方に中心がおかれて討議がなされ、SCMと自治会、全学連等との関係、授業料値上げ反対闘争などという具体的な現実的な問題と無関係に学生伝道はなされ得ない等の発言、また、大学におけるキリスト者共同体自体の中にコミュニケイションが成立し難い現実、そこでは聖書研究もうまくゆかない、そこを突破することの困難性。しかしこのような内側の問題を突破してゆくことが外の問題にもふれてゆく突破口になるのではないかとの発言、大学における人間疎外の問題に立ちむかうのは、キリスト教だけのお家芸ではないのではないか、他の学生と共に考えてゆかなければならないという発言、「信仰とは何か」という問いは最もプリミティブな問題であると同時に、学生伝道に真剣に立ち向いながら、常に経験してゆく挫折のうめきの底から常に自分自身に問いかける最も深刻な問いであるという学生の側からの発言等がなされたが、SCMにおいて、学生伝道が今後どのように進められてゆくか、信仰者としての主体及びその共同体の内側の問題を突破してゆくと共に外側に向っての伝道のあり方、メソディクの問題にも今後研究をすゝめてゆかなければならない。そして同時に常に教会それ自体に還ってゆく途を一方にもちながら、そのようなパースペクティブをもって今後の討議をすゝめてゆくことを方向として協議を終了した。

分科会と綜合協議会

さて「学生キリスト教運動の本質と使命」という主題のもとに開催された第二回「教会の生命と使命」指導者協議会は、宮本武之助氏の主題講演に引き続いた四つの発題及び協議を経て、全国SCMの現状の問題状況に立ちながら、しかもそれぞれに指導者としてのパースペクティブと経験をもって問題を整理検討しつゝ、何が基本的に重要なる問題であり、それ故にそれらが今後如何にSCMにおいて荷なわれ、克服されてゆかれるべきかと、その方向を見定めて、①「学生キリスト教運動における聖書研究」②「学生伝道」（福音伝達の諸問題を含めて）」③「大学問題」④「学生キリスト教運動と政治・経済・社会の問題」の四つの分科会に移り、それぞれ発題協議の問題を中心に討議がすゝめられ

でとりあげてゆくことに、SCMとしての必然性を認めるか否かについて問いをせまられたが、学生特に教職者の間では明確な問題の意識が伺えなかった。しかしこの辺の状況分析を今後適確になしてゆかないと、教授、学生、教職者（教会）との有機的な関連においてSCMが生かされないことになるのではあるまいか。これは軽視し得ない問題である。

第五回協議会

第五回協議会は「SCMにおける学生伝道」の問題をとりあげ、小林信雄氏の発題をもってはじめられた。小林氏は、日本のSCMの中では特に指導者の間で「大学問題」というかたちでは過去十年余り組織的にとりあげられてきたが、SCMにおける「学生伝道」(student evangelism)という面での組織的研究は十分になされてこなかった点を指摘し、学生委員会のレポートからもその必要性を痛感すると述べられた後、先ず学生伝道の概念規定から論をすゝめられた。伝道とは、キリスト教のPR、改宗者の獲得ということを第一義的に問題とするものではなく、それは福音そのものの伝達力「福音は福音をもつものの力」であり、そういう福音をコミュニケートしてゆく力としての共同体の力にどのように与ってゆくかということが伝道の本質である。キリストの福音の伝達力に与っているわれわれが世界から選び分たれながら、なお世界に遣わされてゆく（使徒性）。こゝに証し、交り、奉仕という三つの使命があるのであって、この発想は聖書的である。大学共同体の中で生活するわれわれにとっては、遣わされた場所は大学であり、その大学において証し、交り、奉仕の務めをなすのであって、SCMはその意味では一つのレイ・ムーブメントである。この場合、レイティ laity とレイ・アクティヴィティ lay activity とレイ・ムーブメント lay movement は区別されなければならない。レイティは教会全体を意味し、レイ・アクティヴィティは信徒の日常の生活、活動であり、レイ・ムーブメントは各個教会からは区別された一つの組織をもってなされる運動体である。教会によってはレイ・ムーブメントを否定する教会もあるが、レイ・ムーブメントの歴史的な意味は、教会が教会というかたちではこの世に向って十分にその使命を果し得ないという事実からSCMは出て来たのであって、教会はかえってそのことから教えらねばならない。レイ・ムーブメントは教会の堕落から生れ出たものではなく、かえって本来その本質において必然性があるのであり、そこにまた広い意味での教会形成があるのである。

学生キリスト者は、教会より遣わされたものとして、大学の中でそのような姿で証し、交り、奉仕の業に励むのであって、その中で真の人間形成がなされてゆくのである。

証し（ケリグマ）と交り（コイノニア）について　福音のコミュニケイションは、深く between が成り立たないところには、真に of も成り立たない。しかし現実の大学には、この交りの断絶が実に様々なかたちで見られる。SCMは大学において証しをなすとき、これらの問題にどのように関わってゆくであろうか。更に of については、現在の道徳的、倫理的関心の喪失が甚しいとき、福音の伝達は実に困難である。或いは自らの信仰に自信がない等々の問題があるとき、これらは全体として聖書研究が真に受肉し難いということに関わっている。SCMの現状では「信仰とは何か」「キリスト者の在り方」「交りの問題」「人生問題」等というようなプリミティ

に実存的に読みとっているか、そのような自己の生活に媒介されてはじめて学生のよきアドヴァイザーとして、ＳＣＭのよき指導者として学生と共に学び、共に生きる者となることができるのである。また学生伝道は必然的に教会との関係においてとらえられなければならない。「教会からつかわされて大学へ」「教会から教会へ」というが、現実に学生の訴える悩みの多くは、教会から遣わされて大学へというようなバイタルなエネルギーを教会から与えられない。或いはＳＣＭの活動をすることを牧師は好まない等々という問題である。このような教会の現状であるとき、学生はどうして力強く大学において伝道の生活ができ得るであろうか。また知的な学生が現実に生きる様々の問題をかゝえて教会に求めて来ても、教会が真に彼等をその現実において力強く生かすような福音を与えていない。そこには今後大いに反省検討されなければならない教会の問題、教職の問題があるのではなかろうか。このような意味ではＬＭＣは今後教会のリニューアルに積極的な意味をもつものである。

大学問題」の分科会は次のように報告された。われわれはこの分科会において、指導者の立場から大学の問題を明確にする意味の重要さを問い、その中心は大学にあって学問理論の認識主体である人間がキリスト者であることから必然的に学問と信仰のインテグレーションを如何に果してゆくかということが中心課題であることを確認した。学生キリスト教運動の目的は云うまでもなく大学の内外に福音信仰を証しすることにあり、おのずから教会の伝道所、大学生活の補導、単なるサークル活動、はたまた思想運動とは異る。ＳＣＭはまた往々にして陥りがちな余暇活動的な活動でもないのである。最近とみに大学に関する発言は多くなり、大学におるものとして、その人の立っている立場、信仰との関わりから積極的になされているが、我々キリスト者は、よくその使命に耐えてゆけるであろうか。ＳＣＭは大学にあるキリスト者の群として、大学そのものの使命に根本的に切り込んでゆくべき使命をもっているのであって、教会の伝道所の如きものとは明確に目的と性格とを異にするものである。以上の発言は旧制大学的であって一般の大学のＳＣＭには通用しないという批判もあるが、最近の大学一般をみるに、それはすぐれて機能的であって、真に大学を大学たらしめるためには真にアカデミックでなければならない。マスプロのへい害、人間疎外、そこでは学生と学生、教授と学生、教授と教授の間の人間的触れ合い、人格的出会いの途は全く閉ざされようとしている、人格共同体たるべき大学は今や全く危機的状況にある。それを回復せんとして学問研究の共同、学生補導、学生会館等々の対策が大学側からなされてはいる。しかしこれらを通して、互いに大学にあるものとして本質的な関わりがなされているであろうか。ＳＣＭはその本質的な使命として、これらの問題に切り込んでゆく課題をもっているのである。

「ＳＣＭと政治経済社会」の分科会は次のように報告した。戦後の学生キリスト教運動が、「教会より教会へ」という標語のもとに教会自体の中から起っていったが、やがてそれが再びＹＭ、ＹＷの組織の中にバトン・タッチされていった過程をたどった上で、ＳＣＭの政治、経済、社会の問題に対する関心態度について討議を行った。大学には学問真理の探求と共に、社会の良心として、また学問

た。この分科会は前後二回、計五時間を費して討議が重ねられたが、問題それ自身の重要さと困難さのために、十分に討議が尽くせぬまゝ最終の綜合協議に臨むことを余儀なくされた。

分科会の報告は先ず「学生キリスト教運動における聖書研究」からはじめられた。大学における学生キリスト教運動において、聖書研究が真に柱としての位置と役割をもたなければ、いかに賑々しくプログラムを飾ってもSCMは真に大学の中に活き活きと生かされず、その本質と使命を失うものであるという、聖研のあるべき姿は確認されたが、SCMの現実においては非常な開きがある。現実には聖研は積極的な意味で柱となっているのではなく、むしろ消極的な意味でしか柱としての役割を果して得ていないのではあるまいか。われわれは今後それぞれのSCMにおいて聖書研究の位置づけと共に、本当にそこから生かされるような真に生きた聖研を問い続けてゆかなければならない。そしてSCMの聖研はその意味で教会の礼拝に必然的に連なるものであるが、そこには教会自体の問題も多くあるのではないか。またSCMにおいて、ディヴォーショナルな聖研とクリティカルな聖研との媒介統一をどのように求めるか。クリティカルな聖研に徹することによって、ディヴォーショナルなものが生れてくるのではなかろうか。また聖書研究の主体が、学生中心でもなく指導者中心でもなく、両者が有機的に関与しあう相互主体的な第三の途があるのではないか。この点に関しては指導者自身のあり方に負うところが多いのであって、この点を指導者自身が十分に自覚し、深く考えてゆかなければならない。あるいはまた大学における聖書研究に非常なリアリティをもつ場合、教会から離れるようになることがあるが、それではSCMの聖研は結果的にはマイナスになるのか。むしろ教会の現実にこそ大きな問題があるのであり、教会の礼拝に参与することによってSCMの聖研がより正しく支えられ生かされるような礼拝が教会において守られねばならないのでないか。また信仰は現実的契機の媒介を必要とするという原理を学生自身がSCMの中から発見したことは高く評価さるべきであるが、同時に、また聖書研究も現実的契機の媒介を必要とするのであって、その点で聖研は大学問題と密接に関連をもつものであるが、現実的にはそれはどのような姿をとるであろうか。

「学生伝道」の分科会は次のように報告した。結論的には学生伝道は本当の意味でインテレクチュアルでなければならない。無論それは単なる知的ということではなく人格的な意味で、或いは実存的主体的な意味でインテグリティのある人間形成ということが我々の課題である。このことは学生伝道という観点から特に重要である。大学において我々の出会う隣人は多かれ少なかれ理性、知性において生きようとしている学生である。彼等をして我々の伝道のオブジェクト視することとなく、真に隣人として連帯的に生きようとするとき、我々の信仰はファンダメンタルではあり得ない。この意味でSCMの聖研も道徳的・律法的、ファンダメンタルであってはならず、もっと人間存在のグルントに関わるような或いは大学問題そのものの根底に関わるようなメッセージとして聖書を読みとってゆかねばならない。この点でSCMの指導者は重要な役割使命をもつ。指導者自身が自らの専門分野においていかに創造的に生きているか、そのような生活の中で聖書をいかに確実

全国指導者協議会に参加して

林　健　二

協議会が終って、既に三カ月以上もたつので、新鮮な思いをもって感想を述べることはとても出来ない。そこで今尚深く心に刻み込まれていることと、それを現在直面している私の問題との関わりに於て述べてみたいと思う。

まず第一に聖書研究に関して。「聖研こそ学Yの柱だ」と云われるのであるが、実際には極めて低調であって、決して柱にはなっていない。このことを私は協議会で再確認せしめられた。一つには、具体的状況を踏まえて立つことの不徹底ということが考えられる。「学Yにおける」聖研という時、そこには学Y以外では見出す事のできぬ、学Y独自の聖研という意味がある筈である。学Yの会員は例外なしに学生であり、この学生という共通の基盤に立つ学Yに於て聖研が行われる時、必然的に学Y独自の特色が現れて来る筈である。学生という具体的現実を抛棄しては、学Yの存在理由は何処にも見出せないであろう。従って学生として生き、そこで直面する問題の一つ一つと、真剣に対決し、格闘し、この戦の中から、云わば実存的に聖書にきくという事を欠くならば、聖書は答えてくれぬであろうし、従って「生命と使命」も与えられることなく、結局、聖研は学Yの柱とならない。

学Yの置かれている具体的状況を徹底して掘下げ、問いつめ、その状況を踏まえて立ちそこから聖書に問いかけるという事が大切であろう。

次に聖研の方法に関してであるが、従来学Yにおける聖研は、①学生だけで行うか、②牧師その他指導者が一方的に行うか、二つの方法がとられて来た様である。そして①の場合、註解書の丸のみか、読み込みに終り易く②の場合は学生の主体性が失われ勝で、結局何れの場合もうまく行かない。そこで①から②、②から①へと悪循環のくり返しも起りうる。分団協議ではこの点が検討され、第三の道として「指導者と学生が相互に主体的に行

加者一同の胸中は如何であったろうか。思うにこの第二回指導者協議会には昨年の第一回協議会にもまして重要なる意義を与えられたものではなかったろうか。昨年の第一回協議会においては、SCM指導者、教職者に広くLMCの意義を伝え、そこからどのように現実のSCMに関わってゆくかという、いわばオリエンテーション的な性格をもっていた。それから一年を経て、今回は各地の大学の中でSCMの具体的な活動の中でそれがそしやくされ、特に嵐の如く巻き起った政治的社会的問題の只中で吟味され検討されてきた数々のデーターと体験とをもって相集つた協議会であったと共に、特にSCMの学生たちが自らの問題状況を自ら分析し、その解決の方向を自ら見出そうと努力した、まさにその問題に、共にSCMに連帯的に関わる指導者の立場から、学生の真剣な問いと期待に応えつゝ指導者自らの問題として受けとめ、思索を共にしたのである。

三日間の協議は語るべき事は余りにも多く、時間は余りにも少なかった。この協議がどれだけ学生からの問題に応え得たであろうか。とまれ指導者自身いよいよ深く学生との

（二六頁下段に続く）

探求の成果をもって社会に対して貢献してゆく使命をもっている。SCMは大学にあって、大学を大学として、本来の使命を十分に果し得るような大学にしてゆくことに大きな関心をもっているのであって、SCMの政治、経済、社会問題への関心態度もSCMがこれらに直接的に関わるのではなく、第一義的には以上のような経路を通して間接的に関わるのではなかろうか。そういう意味で、SCMの大学問題に対する普段の関心と貢献がこの場合にも重要である。しかし今回の安保問題等のような危急な場合には如何であろうか。この場合にも以上のことが十分に踏まえられていなければならない。即ち、民主々義社会建設に逆行するような政治的暴挙に対しては、大学は国家の良心として勇気をもって発言せねばならないし、SCMもまたそのように働くのである。しかもなお急を要するような場合には、SCMが社会に直接的に行動することも許されるし、あり得るのではないか。SCMがかかる政治・経済・社会問題に対する判断をなすとき、それは如何なる根拠に基くのであるか。勿論SCMは大学にあるものとして、理性的諸科学にその根拠をもたなければならないことは当然であるが、更にそれらの判断は全体として明確なる聖書的神学的根拠に支えられるものでなければならない。先の安保問題のとき学Yはいかなる神学的根拠に立ったであろうか。各学Yではそれぞれ真剣に討議をなしつゝそれぞれの行動をとったが、全体として一貫した明確なる神学的根拠をもたなかったのではないか。全国委員会のレポートには「キリストは教会の主であると同時に世界の主である」という同心円的な神学的根拠に立とうとしているが、それは或る意味で正しいことである。しかし更にSCMとして、この時代の問題に則応するような新たなる神学がSCMのかゝる問題への関わりの根拠として明確になされなければならないのではなかろうか。その意味で、LMCの神学はわれわれに大きな期待をいだかせるものである。

以上の各分科会の報告に基いて最後の綜合協議がなされたが要点だけを記すにとどめておこう。聖書研究の問題については藤森氏が「以前には聖書研究が活き活きしてこなくなると、学生は大抵無教会に走った。SCMの聖研には、クリティカル、ディボーショナルな読み方に加えて更にヒストリカルな読み方があることをつけ加えるべきであった。この三つが如何にインテグレートされてゆくか、そこにSCMの聖研の突破口がある」と語られ、また北森氏が「信仰は現実的契機の媒介を必要とするということは正しいが、学生たちはこれをどのように受け取っているのか。これが一つのフォームとして定式化し、逆に内容がそれに伴わなくなるとそれは危険である」といわれたことはそれぞれ重要な発言であった。またSCMと教会の関係では、新見氏が「教団の青年専門委員会の学生伝道委員会では、学生伝道に関する基本方針として、従来のLMCの方向を全面的に支持することを再確認し、これを支持することを明文化し、青年専門委員会はこれを正式に認めた」との発言をされたことは誠に印象的であったし、其他各教派団体のSCMとの関係の立場を披れきし合ったことは、LMC指導者協議会の最終日にふさわしい収穫であった。

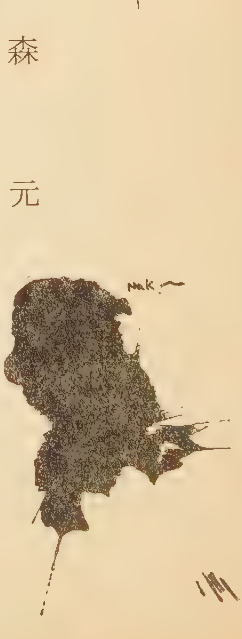
むすび

かくして三日間にわたる第二回LMC指導者協議会は、なお語るべくして語り得なかった多くの問題を残して閉会礼拝を迎えた。参

こころみ

――戦後の学Y運動の中からひろった問題――

藤森　元



一　はじめに

最近、わが国においてもキリスト教倫理の問題がとりあげられて、福音信仰がみずからの中から倫理をうみだす力を現実にもっているかどうかが問われている。ある意味では、その力が極めて微弱であって、もはやその問いに答えられないような印象をお互いのうちに与えているようでもあるし、又、従来一般に考えられてきたような形式、つまり福音信仰と現実との関係において福音を倫理化する方向において媒介するあり方を極めて疑問視して、もっと生(なま)のままに福音を受けとって改めてその関係を組立ててゆこうとする意欲も学生基督教運動のなかで生まれてきている。そこには当然すべてのキリスト者、あるいは教会に、一定して客観的に共通したなにものかが存在すると安易に前提することを排除して、神学書の一応の説明や講壇での論議を一応理解してもそれに満足せず、又片方、それが、この現代的世界の一点に存在しているこの私の無限に強烈な自己意識による所為であることを一応認識もしてもいるのであるが、――それをもし勇気をもって徹底的におしつめるとするならば、そこには確かに神の入りこむ余地はない――あえてそのような自己探求の道へふみだそうとする烈しい試みである。そのような探求のあり方においては、議論は決して信仰の範囲内でつくされそうにもありえないし、そこから何か生産的なものが必ず生まれてくるという保証もない。外国の神学書を勉強し、そのような思想空間でのみ、ものを考える日本の神学者や、特別の人間的配慮に心をうばわれがちな、いわゆる教会人のあり方では極めて取り上げにくい性質のものである。そこでは自分自身に内在する問題を在りのままに、自分自身に忠実に、内面におこる殆んど無意味と見すごされる現象をも見落すことなく取り上げてゆく勇気ある態度を必要とする。そして結局は、凡ゆる誤解と批判をあびつつも、現実の中で自分の言葉でもってする各人の信仰告白――そもそもあのイエス・キリストはこの私にとって一体誰であるのかという問いに答えてゆくことであろう。思うにこの問いは、私がキリストによって「なんじ我を誰というか」と問いかけられているところに対応して生ずるそれであろう。そもそもキリスト教福音信仰とはインテレクチュアルな理解で

う聖研一という事が考えられた。この相互に主体的に、ということは聖研に限らず何れの場合にも貫かれねばならぬ、判りきった事である。それだけに余計にはっきりして置く必要がある。具体的にどういう形で相互に主体的な線を貫くかは、状況に応じて探求工夫さねばなるまい。これという「きめ手」がある筈はない。マナーがイズム化される時、マンネリズムに転落するのがおちなのだから。

　第二に使命ということ。私は、この協議会に招かれた韓国の指導者達の中の一教授の訴えを忘れる事ができない。嘗て朝鮮に対して日本が犯した罪の数々、キリスト者に求められている和解の使命、こういう訴えの前で、私はこの日本の現実の中での執成の働きという事を痛切に考えさせられた。暴虐な戦争への参加ではなく、執成の戦への参加という事をである。少くとも私の関係する学Yでは会員の大多数を占めるノン・クリスチャンの信仰の導きに明け暮れて、証の共同体など文字通り高すぎる世界である。これが又指導者達の深刻な悩みである。もはや多くを語る紙面を許されていないので一言だけ。現実がいかにもあれ、否そうした現実であるからこそ、何よりもまず、この私が、日本の大学と学Yのために、力をつくして執成の高く重い使命に生き貫く者でありたい。

（日本基督教団山口信愛教会牧師）

須佐美浩一

今回の指導者協議会は一月の全国学生委員会の現状報告をその足がかりとして「SCMの本質と使命」が追求されたのであろうが、私は途中からの参加でありしかも三カ月を経た現在、感想をといわれても感想が書けるかどうか疑わしい。

　全国委員会では学生により現在の学Y活動の全体が問題とされ、かなり明白な現状が出されたように思っている。協議会でも四つの面からSCMの現状が追求された。

　私達学生キリスト者にとっては最も基本的なキリストを信ずるキリスト者としての使命と現代の大学に生きる学生としての使命が、即ち、信仰的契機と現実的契機の統一媒介が自己のなかでどのようになされているかが常に問題となる。しかし実際の学生々活ではきわめてアイマイである。現在の学Y活動では個人の信仰の確立、深化がその中心となり、あるいはそれが政治、社会問題といった現実との関連においてなされている。このような現状の中で反省する事は学生キリスト者としての二つの要素契機が分離され、あるいは一方にかたよっているのではなかろうかという事である。私はこのようないみあいから第三の大学問題に強い関心をもって参加したのである。現在の学Y問題もこの大学問題の中に集約されるのではなかろうか。

　一口に大学問題といってもその内容は多種多様で一つの問題にしぼって考え把えるのは難しい。鳴海先生の発題では基本問題となるような点がかなり独自の立場からふれられたように思ったが、分科会では表面的現象的な大学問題と本質的問題とが右往左往したにとどまった。現代に生きる学生キリスト者が現代の大学を把えかね、又学問に対する態度を確立しかねて現象、ムードに流されているところに学Yの根本問題がある。この協議会全体としても全国委員会の現状報告を整理した程度に終り、この根本問題が追求される迄に至らなかったのは残念である。

　しかしこの会を通して、多くのいろいろな層の指導者と親しく接し、意見を聞く機会を得たのは有益であった。殊に韓国の指導者を迎える事が出来たのは有益であった。協議会への参加を感謝します。（同志社大学学生）

ても重要な課題を果してゆく。こういう意味でマルクシズムを内から支え、克服してゆく、そしてまさに信仰はこの「主体」の面に関わるというのが一貫して主張されてきた点であった。いわば反共ではなく、又、いわゆる容共でもなく、コンミュニズムを含んでこえる立場の形成であった。

しかし以上のことが実際的な学生運動、学生としての日常生活の面で検証されてみると、事実はそう簡単にはなかなかはこばない。激しくおしよせる現実にそれに極めて直接に反撥する自分の内にあるドグマティズム、外からあおられる強烈な歴史意識に、かえって現実から足を浮き上らせる危険に対する警戒、さては究極的には、たとえキリスト教が社会的実践やその論理の体系の形成にいかに貢献することができたとしても、究極的には、やはりそれはキリスト教の神を拒否しているのではないかという不安、「それでいいのだ」と云いきれない問題性等々キリスト者学生達の苦悩は大きかった。そこには又、こういう日常的信仰の戦いから逃避して、いわゆる生活へとにげる充分の誘惑もまちかまえていたのであった。問題はむしろ大手門からではなく、からめ手より、切りくずされていったのであった。

実存主義に対してはどうであっただろうか。実存主義の露呈する人間性のもつ致命的問題性に対してイエス・キリストの福音がかかわっていることは論をまたない。しかし永遠性にも安住することができず、さりとて絶望の深みに沈潜することもできないが故の人間性のもつ問題性に対して、魂の崩壊を救ったものは決して直接的な神の奇蹟的な手でもなく、教会の説教でもなく、教えでもなくて、きわめて単純な人間的な同情と理解の同感であったことは、戦後の私共が学生運動のなかで、又極めて日常的な生活の中で一様に体験したことであった。又、ある時は同情的であり、それ故に冷静な実存主義的分析、心理学的客観化を通して自分の姿が対象化された時、そういう共同作業を通しての人間的やりとりが、極めて端的にこの私を救ってくれたことを度々実感するという経験をもちあわせたのである。この時この私を救ってくれたのは神ではなくて人間であり、哲学であり、又科学であったのか、神なくしてこの私は生きうるのではなかろうか、という激しい疑問にさいなまれる。しかし、その時、私はこのような手段をとってまで私を救いたもうイエスを信じ、その栄光の彼に帰すべきことを知りつつも、今までよりもいやまして、この世界と人間とに愛情をほのぼのと感じて、かえって神にそそりたつ自らの人間としての自己意識を強烈に感ぜずにはおれなかったのである。その出来事を神に帰することこそ、人間を裏切る卑劣な行為ではなかろうか、というのが一般にキリスト者学生の実存主義を前にしての問題意識であったと思う。

最近は又、いくつかの大学において、仏教団として長い伝統をもつ我が国の存在論と云うべき無の絶対性が主張され、それにもとずく思想運動がおこっている。このような主張、存在の虚無性から、あるいは存在の根源である無の面から一切に接近してゆこうとする態度が――西洋哲学的素養に媒介されて意識的に、あるいは東洋的直観により無意識的に自覚されて――支配的であるわが国民の思想生活において、一体キリスト者は如何に関わろうとするのであろうか。その虚無性を、むしろ福音に媒介する積極的意味をもつものとして承認してゆくのであろうか。無は自らにおいて存在へと否定的に媒介しうるものであることを主張して、そのことにおいてこの世に

なくて、神なき世界に神ありと告白して意志的に生きるという課題にほかならないからである。

もとよりキリスト教福音信仰と倫理の問題はイエス自身によって既に原理的に解決をみているものであるが、それが今日キリスト教の死活問題として改めて問われるようになったのは敗戦を契機としているように思う。その道筋をささやかな私の体験からあとづけてみよう。敗戦とともに従来の国家主義のわく内で形成されてきた国民道徳が崩れ去り、一切の価値が顚倒したとき、改めてわが国のプロテスタント教会の福音信仰の倫理性が問題となったことは理解に苦しくはない。それは戦前のキリスト教が、いささかなりとも時の権力に妥協してきたことを自覚するかぎり、自己内部で否定的に克服するというあり方で問題になるのは必然であった。このことを当時の学生キリスト者が自覚的に取り上げた時、キリスト教に対立して、自らこそが新しい倫理の形成者だとしてたちあらわれてきたものはマルクシズムと実存主義であったと云うことができよう。マルクシズムの日本のそれは、時の権力に妥協することのなかっただけに無傷のものとして前面にあらわれ、実存主義的思惟は戦後の強烈な自己意識を裏付ける人間性の主張として日新しさをもって出現してきたのであり、キリスト教はこれらとの挑戦と応答の対決において自らの問題と取りくまざるをえなかった。我々の先輩たちは、これらに対し何らかの応答を示し、自らの神学と人間性を形成してきたのであるが、それでは一体この戦い——挑戦と応答——をどのようにフォームレートしてきたのであろうか。

二

マルクシズムに対しては、それをキリスト教の側からして信仰とは次元を異にするものとして規定することは形式的な処置にすぎない。我々の意識はむしろそのような意識を排除して、一応マルクシズムの存在を肯定した上で、それを克服してゆこうとするものであった。そしてその媒介接触点を「科学性」という点においたのであった。当時の私共に語られた言葉のなかで「キリスト者の学生か、マルキスト学生か、どちらが本当に学問するかが、日本の将来を決する」と。これらの主張の根底には科学を支えている理論の前提として主体的エネルギーを重視するという考えがあって、マルクス主義が理論を発展させる要素を大体実践という概念で要約してしまうのに対して、そのような外部的経験そのものよりも、むしろ経験を新しく照らし出してゆく新しい起動的アイディアをより歴史を進める力として重要視してゆくのである。それ故に学問においても、その体系の中に主体の問題を入れる。人間類型の変化と社会の変化とを見合ったものとして取り扱う時、マルクス主義が制度の側から人間を把えるのに対して、行動する人間が主体的に思惟するところの意味の組合せとして制度を理解するという逆の方向を主張する。学問としては無意識的な存在として社会を組み上げている人間行為を意識化して取り出す方法として仮説（イデアル・ティプス）を設定する。それによって古い事実のうちに新しい意味を発見し、経験に付与する主体的意味を重視する。学者としては学究の主体の信仰が生のままに露出することなく、学問的に結晶されながら、しかし学問の方法の中にしっかりと貫ぬかれてゆく。こういう考えから状況と主観からの自由を確立しつつ、かえって変革のエネルギーを状況の論理の中で具体的に展開してゆく。これが、一般の社会革命運動日本的教条主義に抵抗してゆき、社会運動としても思想運動とし

続へと途をひらくか、バルト的に弁証法的統一によって非連続の連続へと途をひらくのか、いろんな考えが互にぶっつかりあってはいたが、互いの発想、意識の共通性、或いは生活の、それも実践的具体的生活の共同の意識の低さのために、問答は極めて相互理解をかき、あたかも悪しき意味での禅問答をやっているような感があったと記憶している。）

「今から考えると神なしとせざる日常生活を超然と侮蔑し、己が追求しつつある信仰の姿を絶対的なものと認め、其処にすべての規範をおいていられた生活は極めて無事平穏であった。その様な状態ですまされていた時期はいわば神に甘えていた状態と云えよう。従って信仰の戦いが自己の全存在をかけて、全生活領域にかかわるものであることに自覚させられたとき、それがはかなくも崩れ去ったのは当然であった。日常生活の大半を神なしとせまる現実の只中に位置づけている自分にとって信仰に全存在をかけると云うことは、この生活全体をも含めたものであることは勿論のことであった。」

「此処から神を恐れる生活が始った。日常性の只中に信仰を問うという態度は、その日常性の性格が本来神なきものであるかぎり、その戦いは苦悩をきわめたものであり、その悩みを訴えて先輩や指導者の意見を拝聴することが盛んであった。しかし彼等が与えてくれたものは結局「私も一度その道を歩んだ。それでよいのだ。その悩みこそ信仰の生きている証拠なのだ」という言葉にすぎなかった。私はその言葉の中に慰めを得、はげましを見出したが、その中に何か気付かれないごまかしがあるような気がしてならなかった。永い年月の間にか彼等が現在獲得している状態こそ既に安定している万人の到達すべき信仰の戦いのゴールであるかのように錯覚し、具体的内容こそ異なれ私共と同じ次元に属する悩みを現在も戦っているに違いないのに、あたかも私達との間に次元の差のある様な錯覚を持っているのだ。」

「すべての悩みを信仰プロパーの中へ解消できた神に甘えた時期から神なき現実の只中に全存在をなげかけて生きてゆくことに信仰のあり方を自覚した時、私は私の生活が神への反逆と云う性質をとり始めたことに気づいて愕然とした。神に対する恐怖の念が起ったのである。しかしこのことは同時に、神なき世界に徹底的に生きようとする決断の契機ともなった。即ち恐怖という異常な感情を拭い去らんがために、従来の神中心的生活を敢えてたち切り、神を生活意識の外に追い出してしまうことを意味する。そして又、神に対する恐怖の念が何時の間にか和らいで日常性の中に安住するようになった自己に気づいた時、神なき立場そのものから自己の生活をきびしく追求するあり方を構成してゆくことであった。こう云った世界の中での自己追求には、観念的な論理は意味をもたない。私の生活の全行為の中に私の存在を確認しつつ、又そういった行為の経験を通して一身をもって獲得した思考様式にもとずき生活し、思索の中に反省を試みてきた。」

「私は私自身の主観に立つとき、いまだ自分の立場にふと堕落とか不信仰とか云う表現をしてみたくなるような感傷的な、根拠のない批判と反省心があることを知り、出来るだけそれから逃れようとするのであるが、幼少の時代より植えつけられてきた感情の機構は容易に消去できないものである。それ故にこの事実を無視すれば不知不識のうちにこの感情が生活のうちに顔を出してくる

きびしく烈しく生きている人々の姿に敬服して、その故にこの日本的思惟の意味を承認するとしても、一体いかなる挑戦とうけとり応答してゆくのであろうか。最近これらの点を覚えて書かれたキリスト者の著述の中に極めて安易に問題をとり扱っているのをみる。逆説すればその安易さの中に、この日本的思惟に全面的に降服しているのを感ぜざるをえないのである。

三

以下は、先述のような問題性のなかで歩みをつづけてきた仲間が、語らいのなかで反覆してきたものを綴った文章の一部であるが、それを引用して問題のニュアンスをつたえたいと思う。（一九五七年度　京都大学基督教青年会　時報より　執筆は筆者ら三名）

「大学に入学し、学Yのメンバーという立場から信仰にまともにぶっつかってゆく生活をしてきた私の遍歴をいまふりかえり、又現在の私の状態を考察したいと思う。学生時代の生活が信仰を中心とした生活であったとは口はばったくて云えないが、学業を中心にしていなかったことは確かである。日常の生活などは蔑視したい様な年頃であった私は、信仰生活が日常生活から独立して追求できるものであると誤認していた。しかし、学生でありながら学業をそっちのけにして教会に行ったり、考えたり、読んだり、あるいは議論したりして形成された私の信仰なるものは、神なしと迫ってくる日常の生活との対決の中において信仰を告白してゆかねばならぬことを知ったとき（この極めて当然なその本来の意味を学Yでの生活をとおしてはじめて認識させられた時）信仰は耐えがたい重荷となり、かつて東山荘で流行した「疲れ」と云う言葉はこの意味において実感として迫るもののあることをしみじみと感じた。」（註、執筆者らは自然科学を専攻する学生で、その学徒としての生き方を徹底する時、ある意味では、一切を客観化せずにはおかない実証の立場と、一般に実証しえざる領域として保持すべきものとして説明されている信仰の立場との間に思索の身を挺し、改めて自己の信仰に検討を加えようと普通にはあまり生産的でないように見える問題を敢えて提起していった。執筆者らの周りには、「なるほどキリスト教のいうことはよく理解も出来るし信仰したいと思う。しかし科学をやっているものとして対象（神）を一応客観的にとりだして見せてくれるのでなければ信仰したくとも信じられない」と云う仲間たちにむかって真の対話をなし、コンミュニケートするために、つまり私にとって真実のものが相手にそのままにわかってもらえるために、そこに存在する基本的問題を考察していった。又、その頃、京大青年会の寮では、入寮者選衡その他の問題から一人一人の寮における、青年会におけるあり方が問題となっていたし、「一体キリスト教信仰とは何であるのか、イエスを信ずるとはどういうことか。」「イエスをどのように考えるか」という問題を問題として一人一人がつきとめてゆくことが、特に必要不可欠のことと思われて、筆者などはたとえ誤解がおこることが充分予測されるのに、あえてブルトマンがどうの、バルトがどうの、ティリッヒがどうのと、皮相的ではあれ、考えてゆく手だてとして話しあっていた。学生諸君はそういう私をハッタリ屋としてひやかしてくれた。キリストの事実を極めてバク然とした言葉、宗教性という感情的言葉によって表現し、自己の神秘的宗教的体験のようなものに帰して他のものの関わることを拒絶するか、あるいは哲学のなかに解消し合理的連

なかろうか。もはやこの科学的時代に生きる我々には従来の宗教的思惟はきわめて縁の遠いものとなっているのは事実であろう。あえて問題提出的な意味で述べてみた。もし信仰が先述のような意味において作業仮説であると云いうるならば、その言葉のもっている要素、その概念のもつ普遍性と未知性とを自覚して、文字通りその仮説を拠りどころとして生きてゆくという責任ある作業をなしてゆくのでなくては言葉は空しい。このことは充分に自覚しているつもりである。

五　むすび

私は今までに、現代に生きる人間として、内外から提起されたキリスト教信仰に対する挑戦とキリスト者の応答について、私の学生キリスト教運動にたずさわっての経験からひろいあげた幾つかの事例をあげて説明した。これらは、ある意味では一般性をもっていると認識してよいろが、やはり特殊で、ごく限られた学生ＹＭＣＡのなかで問題になったことであって、或いは現在運動にたずさわっている学生諸君には極めて異質のものを感じさせるかも知れない。もしそういう印象を与えたとすれば私の無力のいたすところであるが、この問題は極めて原理的なものであって、特殊なもののみの問題性ではない。それにしても、ここ二、三年の日本のあらゆる状勢の変化と学生基督教運動の変遷を思わずにはおられない。これらの問題は克服されてしまったのではなく、むしろ我々の運動がその問題意識を放棄してしまったのではないかとの危惧の念をいだかざるをえない。もしそうだとすれば、学生基督教運動の危機であると云っても過言ではなかろう。それはまた日本のキリスト教の危機であるのではなかろうか。

さて最後に―それでも結局は、キリスト者は一体、何にもとずいてこの現代の挑戦に対して応答するのであろうか。彼はこの答えを自分自身で与えることはできない。彼はそれをうけとって与える仲介者の役目を果すにすぎない。答えるのはイエスである。思うにキリスト者は一人の人間として、「あなたはわたしを誰と云うか」とのマルコ伝第八章二十九節の問いのまえに、この問題的状況の下でたたされる。彼はイエスによって問われている一個の人間として、この状況の下に、そこから逃げだすことをせずにこの問いに答えねばならない。そして、この答えは、この問いの問い主であるイエスに対してなされるそれであるが、同時におかれた状況に対してもなされなければならない。つまりその状況の提示する問題性に対する答えは、実は「わたしを誰というか」というイエスの問に対する答えを通してあたえられる。いな、むしろ積極的には、イエスの問いが状況の提示する問題性に対して逆に問いかける問いであり、その問いこそまさに答えであるという構造をもつ。その問いと答えにおいて状況的世界のもつ問題性の本当の姿が照し出されるのであろう。まさにキリスト教的認識は答えにおいて問いが問われるのである。

それではその答え、根源的問いはどこからくみとられるのであろうか。その源泉は聖書における神の言葉である。その故に、聖書の研究に一切の努力を、この問題状況のなかで試みてゆかねばならない。学Yにおいて聖書研究が改めて強調される所以である。しかしこのような問題意識が自覚されればされるほど、きわだって異なった問題意識が対立してくればくるほど、夫々の自己意識が強烈にめ

（六五頁へ続く）

のをまぬがれない。そこで、この曖昧さを除去するためにもイエスを私の行為、思索、生活様式のモデル（実証科学で用いる意味での）として意味づけるようになった。」

「もし私がキリスト教信仰を有していると云うならば、それは自分の為に、自分が経験のなかから造りあげた、いわば生活信条の一つである。そしてそれを敢えてキリスト教とよぶ所以は、私の全生活のモデルとしてイエスを持つからであり、生活と思索の、方法、材料、実例が聖書に、そして根本的にイエスの生活と思索に基づいているからである。私におけるキリスト教の意味はこのようであるが故に、現在の教会というシステム、或いはキリスト教のドグマにはもう全身を依存することはありえない。」

「結論的に云うと、問題が問われる場所は神なしとせまる現実の只中であり、又、そのような日常性のなかで私の人間は形成されてゆくのであるが、其処における解答は他の人が経験によって獲得したものを知的な理解によって与えられるものではなくて、私自らが、意志的に追求し獲得してゆかなければならない。此処でイエスをモデルとして受けいれることは、イエスを信頼し、彼の言葉と行為とを受けいれて、それと素朴に対決してゆくことである。その結果、たとえ私の戦いが破れ去ることがあろうとも、それによって私の存在が確められるであろう。私はこの試みに全存在を賭けるのである。」

四

さて、以上の引用の根底にある考え方をひきだしてみよう。そこには先験的直観的形式として把握された一切の概念の本質的な変更を要求するところの、絶対性の否定、つまり一切の認識の相対性の主張を出発点とし、既に自己に納得してうけとられた認識から、未知の領域に含まれる現象の部分的類似性に注目して推論を進め、これによって未知の領域の法則性の内容を明らかにし、よってその認識の普通性を獲得してゆこうという態度であろう。これこそ現代人の思惟形式に他ならない。そして更に特徴的なことは、認識における主体と客体の問題を極めて厳密に自覚していることであろう。これまで意識を含む主観に対立する客観として認識してきた認識方法はもはやそのように安易には片づけられない。あくまで主観は客観的世界に無関係ではありえず、客観的世界はあくまでそこに生きるものの思索と生活の様式の固有性によって定義づけられ、又逆に、そこに生きるものは、あくまで客観的経験世界からの要請で制約をうける、いわば客観を媒介とする主観であって、それは決して信仰というような主観乃至主体性が直ちに介入するものではない。それ故に自己の信仰を追求してゆくということは、結局客観に対する経験的世界と主体の思惟にもとずく可能的世界との対応関係を自覚してゆくということに帰着するのであって、そのために、種々の模型と類推とを重ねつつ、信仰とは何ぞやとの概念を構成認識してゆくのである。

さて以上いくつかの例をあげて私の考え方を述べてきたが、これを正面から神学の問題としてどのようにフォーミュレートすべきか知らない。あるいはとんでもない考え違いをやってしまっているのかも知れない。しかし、このような形で一応定式化してゆこうとした私の考え方は、現代という時代に生きて自らの信仰のあり方を形づくってゆこうとする現代人としての試みの一つでありうるのでは

い面が多いことだろう。運動方法ももっと機動的に考えられねばならない。たとえば通学のバスの中で、たとえば寮のお風呂の中で、たとえば散歩道で、たとえば昼の食事をともにしながら等々……。文字どおりひとりびとりの学生が一粒の小さな麦となって、学生大衆の中に沈みこんでゆかねばならないだろう。

話が大分脇道にそれたが、そんな生活を強いられるただ中で、むしろそうであればあるほど失ってはならない一劃として、しかと守られねばならないのが「聖書研究」であろう。SCMを他の学生運動と区別し、基礎づける根拠はこれ以外のどこにも存在しない。

「聖書研究」にもいろいろな方法があろう。大学のSCMではセミナー式のものがよいのではなかろうか。よい指導者の参加が得られるのに越したことはないが、それもひどく困難なときは仲間だけでもかまわない。大学生であるなら、少なくとも一外国語はかなり自由に読めようし、他に一つ二つぐらいの外国語は辞書をひきながら読むこともできよう。大学のSCMにおいてこそ、外国語の註解書なども、だれにつまずきを与える懸念もなく存分に利用できるのではなかろうか。テキストに忠実な、そして学生らしい活発な討議に充ちた「聖書研究」そこではほんとうにみことばがみずみずしく息づいているような「聖書研究」をと願っている。（一九六一・六・七）

（津田塾大学教授）

学Yの聖書研究から献身へ

森野善右衛門

私は、一九五五年（昭和二五年）に広島文理科大学（旧制）に入り、五八年に卒業した。その間の三年間を学Yのメンバーとして、クリスチャンの先生、学生との恵まれた交わりを与えられたことを深く感謝している。私の学んだ物理学科には、竹山晴夫教授がおられ、学Yの交わりと活動の中心となって下さった。教授を囲んで、昼休みや放課後に自由に話し合う時を得たことは、今でも忘れ得ない思い出である。同じ学園に学ぶキリスト者の教授・学生の人格的交わりが、学生生活にとっていかに大切なことであるかをしみじみと感じさせられる。

学Yの活動としては、妹尾清夫牧師によるロマ書研究と、ギリシャ語聖書研究（ヨハネ第一書）をつづけた。集まる者は少数であったが、貴重なみことばの学びの時であった。キリスト者は、日本の大学では人数が少ないので、とかく孤立し、自己閉鎖的となり易い。しかし、キリスト者学生が大学の中で与えられている責任は大きい。広島にある他の大学との交流協力のために広島学Y連盟ができ、また、中・四国学Y連盟ができ、一しょに夏期学校を開くことができるようになった。その時の主題は、たしか「証しの共同体としての学Y」であったと思う。ともすると知識の切り売りの場となり就職のための機関となってしまい勝ちな学園の中に、いかにして共に学ぶ者の生き生きした対話、交わりをつくり出し、そのことによって主を証しすることができるか、——それが私たちに与えられた最も大きな問題であった。そのために私たちは、現実の問題をもって聖書のみことばに帰り、聖書に正しく聞くことから出発せざるを得なかった。生きた聖書研究は、今も昔も、学Yを支える生命であろう。

学Yの交わりと活動とを通して私は現実の問題の中で聖書を読むことの意味を教えられ、福音の伝道者として立つ使命感を与えられたことを、何よりも深く感謝している。

（日本基督教団金沢若草教会牧師）

学生と指導者によるアンケート

聖書と学生キリスト教運動と私

聖研特集号にちなみ、学生キリスト教運動（ＳＣＭ）と聖書研究の歴史を振り返りつつ今後の展望をなす意味で学生・ＯＢ・指導者の方々にアンケートを寄せて頂いた。（到着順）

海外での聖書研究

高木暢哉

昨年の春から夏にかけて、私はハーバード大学にいた。ここには、すでに何人かの同信の人がきていて、毎週日曜日の午後には、聖書研究会をもっていた。私もその仲間にいれてもらうことになった。Ｍ・Ｉ・Ｔに来ていた人も加わって、常時七、八人くらいのところであったろうか。はじめは、国際キリスト教大学からきておられる秋田さんの家でやり、後には湊宏さんの家に集った。この方は、ハーバード大学の化学の助手をしていられる。

聖書の箇所は、私が参加したときには、ちょうどヨハネ伝の受難のところに来ていた。遠く国を離れ、家を離れ、学校を離れて読む聖書の味いには、一種違ったものがあった。いまは孤独ではあるが、ここにもまた信仰の友がいる。私はキリストが去ったあとの使徒たちのことを思ってみた。ヨハネ伝の記事にみるように、イエスからはこんこんと説ききかされてはいたのだが、いよいよ去られてみれば、孤独であり、絶望であった。しかしやがて教のように、主にあってつながろ信仰の共同体の中に自己を再発見することができた。似たような意味で、私も自分をもう一度あらためて見出すことができたのである。

イギリスに渡ってからは、一つの偶然から聖書中心の福音主義のグループに身を投ずることになった。ロンドン大学では、学生が組織する聖書研究会にでるようになったが、これも忘れ難い思い出である。ウェストミンスター・チャペルで毎日曜日、ロイド・ジョーンズ博士の説教をきいた。私のいたあいだは、悪魔の問題を中心としての連続説教であったが、聖書の丹念な検討を典拠としてのものであった。つねに出席者は堂を満たしていた。（九州大学教授）

大学生らしい聖書研究を

山崎孝子

ＳＣＭから―聖書研究―を除くとあとに何が残るのだろうか。時代は複雑となり、学生生活も遠い昔のように静かにゆたかな時を恵まれないようである。こうした時代にあってＳＣＭもその多くの働きを秩序正しく軌道に乗せることはなかなか困難なのではなかろうか。大学課程のばらばらの講義に出る人々、アルバイトにあわただしく出かける人々、卒業論文や就職のことに追われる人々……こうした学生たちがＳＣＭの大事なメンバーなのである。皆が一室に集合して何かをしようとすれば、都合のよい時間を探すこと自体がたいへんな骨折である実情をしばしば経験している。ＳＣＭの働きにも思い切って切り捨てねばならな

聖書が真理であることは、アカデミックなメスを加えることによって傷つけられるどころか、かえってますます強い証言がなされることを経験したのである。

（岩手大学助教授）

学生時代を省みて

高月章而

私が学生時代を過ごした京都大学基督教青年会の地塩寮では、各自の生活の自由が、完全に保障されていた。それは時として放縦に流れていると見える位であったが、一歩ふみ誤れば、甚だ偽悪的な申し訳けに堕ち入る危険性をはらみつゝ、各自はその自由と責任をきびしくになおうとしていたのである。

聖書に対する取組み方も、寮としての一つのプログラムに従った研究というものは、その必要が問題になってはいたが、実際には、方法的な統一はなかったようである。各自は註解書の助けを借りたり、神学書を読んだりして、一人或いは数人で、聖書ととりくんでいた。そういう訳で、聖書研究に対しては、全く各人各様な姿勢であったが、基本的には聖書に関する知識を深めるとともに、聖書の記事の解釈を、生活の諸事実に照らして検証するということであったように思う。

聖書の研究ということではなく、地塩寮では、毎朝七時から聖書の輪読会と祈禱会を兼ねた朝拝が守られていた。ところが、寮生の中には、朝は十時、十一時頃まで寝ていて、日中は頭脳の働きも何となく不明瞭なのが、夜に入るとミネルヴァの梟よろしく俄然活潑になり、明方近くまで勉強するという夜型のタイプの学生が多かった。この連中にとっては、毎朝の朝拝は実に気がかりであった。中には殊勝（？）なのがいて、朝拝に出席してから寝るというようなこともあったらしい。これではいかんというので、寮生の会議でこのことが問題になったことがあった。いろんな議論があって、朝拝夕拝にしてはどうかという意見が出た。ところが例の夜型の一人が、「それはいかん。一日の生活は聖書を読み祈ることによって始まるべきである。」とやったのである。列席していた者共は、その言葉の重みを静かに受けとめ、朝拝は従来の形式を守ることになった。

私は今、一三週囃のような問題を与えられて、学生時代の自分の聖書に対するとりみ方を省みた時、方法的にはさまざまな試みもあったけれども、毎日の生活が、「聖書を読み、祈ることによって始まる」ことに徹していなかったことを指摘されたこの時の愕然とした気持が、最も重大な問題であったように思える。

（NHK東京勤務）

聖書と私

浜好洋

早稲田に入学すると共に、誘われるまゝに、早大基督教青年会に、顔を出してみた。しかし、そこで与えられたものは、私の態度のあいまいさに比して、何んと価値あるものであったろうか。私達のYで、聖書に接することのないプログラムは、皆無に等しい。当然と言えば、それまでであるが、聖書研究中心の伝統的精神は、良かれ悪しかれ、私達の支えであることは、間違いあるまい。さて二年に亘る聖書の研究は、わずかではあったが、聖書の持つ魅力を私に示してくれた。言い換えれば、イエス・キリストの魅力と言えようか。私とイエスとの関係を、人格的たらしめようと願うならば、そのために、私達がなしうることは、聖書を通して、イエス・キリストを出来うる限り知り、彼の肉

聖書研究はＳＣＭの生命

奈良常五郎

その頃の浦和高校は武蔵野の緑につつまれて美しかった。孤独だった僕は学友たちと語り合うよりも、くぬ木の林を独歩するほうを寧ろ好んだ。

浦高ＹＭＣＡには入学早々すぐに捉えられた。文乙三年の寮長だった森岡正陽さんがＹＭのリーダーだったので、毎週寮長室で聖書研究の集いがあった。ドイツ語の得意な森岡さんはルター訳をふりかざして、強引な講解をされた。僕は文丙で始めてフランス語を市原豊太先生にならい始めたときだったので、古本屋で仏英対訳の聖書をみつけて対照したりした。

佐藤定吉先生がときどき訪ねて来られた。その影響で、浦高ＹＭＣＡは毎週中仙道に提灯を手にもって路傍伝道に出かけた。森岡さんが、マントの裾を肩にはね上げて獅子吼した。僕はふるえながらついて行った。

谷口茂寿先生が来られて聖書講義があった。綿密な講解だった。始めて僕は聖書研究らしい研究を識った。

それ以後永い間の学Ｙ生活のうち、誰にも語り伝えている一つの真実がある。それは、聖書研究をしっかりやっている学生ＹＭＣＡは、どんな小さいグループでも決してつぶれないということだ。勿論、それが唯一のプログラムではない。日本の学Ｙは余りにも内攻的であり、学園における責任をその活動プログラムとして充分に取り入れていない。だが、どんなに対社会的に派手な活動を展開しても、それが聖書研究によって基礎づけられていないといつか道をあやまり、或いは何時しか消滅してしまう。

聖書研究は学Ｙグループの生命である。それは、社会的キリスト教運動の華やかだった頃からの変らない僕の信念である。

（神戸ＹＭＣＡ総主事）

ロマ書を読まされたあの頃

大島孝一

そのころ（一九三七年—一九四〇年）東北大学ＹＭＣＡの寄宿舎に暮らしていた私にとっては、毎週の聖書研究会が精神的な重荷であった、というのは、哲学や文学を専攻する学生にとっては、一種のセミナリーとして直接役に立ちこそしても、理科系の学生が実験で疲れて帰ってからの聖書研究会は、まさにモッタイナイ存在でしかなかった。さらに、教会に習慣的に通いつづけている者にとって、説教の貧困から脱け出るために、聖書研究会に期待をするのである。今考えるとふしぎな話だが、教会の側からは、学Ｙが無教会的だという非難をしばしば受けてきたものである。

問題の聖研（そういう呼称は、私は好まないが）、は当番の学生が山と積まれた注釈書を預けられて、定められたテキストを講義しなければならなかった。時たま、石原謙先生の姿を見ることもあった。北三番丁のあの寄宿舎の広間は、まさに神学校のセミナーを思わせるものであった。私のときは、二年がかりで「ローマ人への手紙」を勉強した。聖書をアカデミックに読むということは、実に驚きであり喜びでもあった。そして、Ｌの字の襟章の先輩たちが、思想の未熟な私の発言を真剣にとりあげてくれると、われながら重要な問題にかかずらっているのだという自信を持つから妙である。（ついに私は今にいたるまで、学生諸君に自信を持たせるような助言をする能力がないままでいる。）

キリスト者が、とかく今まで内にのみこもり切りで、本当の意味で「隣人と共に生きる」という事をして来なかった、という反省の激しさの余り、何かその様な問題に常に卒先して巻き込まれていたい、という気持が、はやった為である。又、私たちは、その様ないわゆる外の問題を外のものとせず、絶えずその中でもまれつつ生きる事が、私たちのこの世に生きる唯一の道であると考えた為でもある。

しかし私はここでもう一度、その事を考える時、そういう時こそ真剣に、どうしても神の言葉を聞かせてもらわねばならぬ、という態度で聖書を読むべきであった事と思う。聖書は勿論只客観的に、読書会の様に読む本ではない。交りの中に与えられた神の言葉の前に一人一人が立たせられている気持で、聖書の問いかけに答えて行く、という、運動を伴う生きた活動が聖書研究である。読む方が生きて求めて行けば生きた言葉となって、我々の活動の直接的原動力となり、我々が死んで読めば、その言葉も死んだものとなるであろう。

現代は思想の無い時代、哲学の無い時代と云われる。人間の言動これすべて、右か左かの範疇で分けられ片づけられ、決めつけられる。我々はその中で、この矛盾に満ちた現実の中で、キリスト者としてどのように生きたらよいのかその真の道を求めてあせりにあせる。しかしここで私たちは、何か定まった方式に基いた行動の方向、生きる公式を求める事を絶対にしてはならないのだ。私たちはこういう時こそ心を静かにして、じっくりと聖書の語りかけて来る言葉を聞き、キリストによって完全に解き放たれた人間としての勇気を与えられ、真の自由に生きる為に、そこから必然的に押し出されて行かねばならないのだ。私はそのような意義を持つ故に、特に現実の中に深く根を下して何事もしようとする学Y活動に於いて聖書研究を第一に重要な欠くべからざる要素と見るのである。

(東京女子大学生)

SCMを貫いている線

黒沼喜子

大きくSCMの歩みを辿ってみても、小さな私の属している学Yを眺めてみてもその歩みの中で聖書の占める位置は大きかったし、聖書研究に中心を置くというプログラム構成がなされてきた。このことは今後も続けてなされることだろうと思う。

私達学生キリスト者の歩みが、真にキリストを証ししているだろうか、又奉仕が、交りがなされているだろうかという問から出発してつきつめていった時、福音にふさわしく生活しているだろうかということに辿り着いた。そこで真に福音に聞くという姿勢をとらされるのである。又現実の唯中で神に生かされている者として真に生きようとする時、取り囲む様々の壁にぶつかるジレンマの中で、出てきたことはもう一度真剣に聖書に聞いていこうというひたむきな態度であった。

SCMとは神の国建設の為に限りなく続けられる運動であると思う。そういう目標に向って歩む時多角的に門戸を開い種々のプログラムを持っている。その中で一本SCMを貫いている線があるとすれば—必ずある—それは聖書である。すなわち取り去ることの出来ないプログラムとして聖書研究がある。

何故ならば、学Yの歩みが神の計画にふさわしいものであるか否かを真実に確かめる場、それこそ聖書であると信じるからである。聖書に向うその時こそ、人間の側の絶対面が否定され相対面が示される。くずおれてもなお立ち返るキリスト者の道は真剣に謙虚

なる存在としての意味を理解し、己を偽れることなくぶっつけて、彼と親交を結ぶことである。人格神たる、イエス・キリストは、私の人間性を通してしか、認識出来ないと思い、愚かにも、己の智恵によりたのみ、秘術をつくして、イエスに迫らんとした。しかし、恵みに富み給う神は、キリスト・イエスを通して、かくも思い上った私の如きにまで答え給うたのである。私達は、聖書に向う時、己の破れを感ぜざるを得ない。そして、その破れは、私自身のいたみであると同時に、恵であることを思う。破れにおいて、勝利を憶え、失望において、希望を見い出しうるのは、実に、聖書の神秘性であり、如何にはねつけられようと、私が聖書に対して、内なるファイトを燃やしつづける所以である。学Yでの、聖書の共同研究は、私をして、聖書が、真に尋ね求めるに値するものであることを示し、私の生きる目的を定めてくれたと言って良かろう。私が、目的をもって生きる限り、聖書―神の言葉―は、私を支えてくれるであろうし、聖書に生きる、イエス・キリストは、私と共に在るであろう。

（早稲田大学学生）

「第三の道について」

原　栄作

去る二月に天城山荘で行われたLMCの協議会での「SCMと聖研」グループで問題となったことについて所感を記します。

SCMにおける聖研の方法ですが、リーダー中心の聖研と学生主体の聖研に対して、学生と指導者の有機的な相互主体的な第三の道が打ち出されました。この第三の道が最も望ましいことは誰でも解っていますが、さてその具体的展開となれば、あいまいとなっているのではないでしょうか。形としても最初に学生が定められたテキストについて調べて来た所を報告し、リーダーがそれに補足的に説明を加え、あと意見を述べ合うというのが多いと思います。所でこの第三の道における学生とリーダーの協同は、単なる形の上でのもの（持ち時間のバランス）ではなく、むしろ意識の問題だと思います。学生とリーダーとが、それぞれ賜物を異にしながらSCMのために協同するという原理が聖研に適用されること、学生とリーダーとに信頼と理解が相互に成り立っていることが大切ではないでしょうか。そのような関係が成立している場合、形の上では学生が中心となってする聖研が多くても、又リーダーから講義式になる場合が時に行われてもよいと思います。

聖書は自己の主体性において読まれることが大切なのですから、学生が中心となって聖研を行うよう、自らを訓練することがなんとしても重要なことだと思います。

（東京基督者学生友愛会主事）

学Y聖書研究について
―東京女子大学の場合―

中村　啓

東京女子大学学生YWCAの活動の中で、第一の地位を占めているのが聖書研究会である。一つには長い伝統から、一つには内的必然性から、聖書研究会があらゆる他の活動に優先すべきものとして考えられ、行われている。しかし丁度去年の今頃、忘れもしない安保問題の頂点に達した頃、又学友会問題が非常に混乱した今年の二月頃、聖書研究というものが改めてその存在の意義を問われた事であった。即ち聖書研究会をつぶしても、そういういわゆる外的な問題についての協議会や懇談会を持ったり、研究したりする時を持つべきかどうかという問題であった。

緻密さに感心したり、あるいはある人はあの大学でこういう任務をもってやっていることを知らされて、成程大学ではこういう仕事もあるのだなあと感心したりする。そうした雑感の中で私の大学での在り方に対する反省をあの会期中させられた。第二の問題に対してですが、格別変化はなく、自分も学生諸君と共にキリストの証のために立たねばと自分自身に新たに言いきかせる程度。

大体私はその会合がどういう風に運用されたか、あるいはどんな結論が出されたかにはあまり興味をもたない人間です。それが今私が立たされている所で、どういう反省と力とを興えてくれるかという点から、会に関心を示すのです。それで唯以上のことしか述べられないのが残念です。

然し、唯一つだけ申したいことは、こんな風に考えて参加します者には現実に学生諸君の一人〱と交わって、そこでYMCA・SCA運動（もっとも私にはYMCA運動、SCA運動が何かといわれても返答出来ないのです。私は私なりに考えていることが多くの先生方の行き方と必ずしも一致しないようにも思えますので）の一員として歩もうと思っている者には、何か物足りない感がしないこともありません。どうあるべきかよりも、まず各々がそのおかれた場所の中で学生諸君の一人〱の魂の救いと幸福に対してどういう配慮をして立っているか、又それに対してどう祈っているかが知らされたいわけです。そうして私の怠慢にむちを打ってもらうこと、そういう性格をもってもいゝのではないかと思っています。そこに教会の生命が存するといってもよかろうと思います。

会合での話し合い、そこから生れてくる結論、それらは同時にそこに参加している人々が、どう闘っているか、又労しているか、あるいは祈っているかということを抜きにしては、全く空虚なものになって了うように感じます。私はこの会が同時に励まし合いと慰めないと、各々がおかれている場所でのキリストの証のためのたゝかいの報告の会でもあってほしいと思っています。又のキリストの証のための真面目な態度に、各々が接しうるような会になることを祈っています。天城山荘から帰ってのまず第一の感想はこんなものです。会がこうあってほしいとの感じが、私をしてかゝることで貢献しうるような実践に駆り立てゝくれることと、そこに会に対しての私の最大の意味を見出しました。

（明治学院大助教授）

（五七頁より続く）

だって、聖書研究会の話しあいは極めて困難となる。よき理解ある指導者を得ることも尚さらむつかしい。これが今日の学Yにおける聖書研究不振の一番の原因であろう。

しかし、困難をこえて行われる聖書研究と、挑戦と応答の具体的、歴史的世界における対話をとおして、福音の新しい理解と展望が与えられてゆく。その時、神自ら、歴史の主として、救い主として、より豊かに自らを我らに示したもうのであろう。

（日本基督教青年会同盟学生部主事）

お願い

去る六月以来郵便料金が大巾に改訂になりましたので今後は送費は皆様に御負担頂くことになりました。

送料は一部二〇円（年八〇円）ですが三部五〇円、五部八〇円と部数をまとめてお送りする時は多少廉くなります。（誌代は従来通り一部六〇円（年二四〇円）です）何卒よろしくお願いいたします。

一九六一年七月廿一日

「教会の生命と使命」委員会

購読者各位様

に聖書に聞くことである。それはとりも直さず神の前に立ち帰り歩むことを意味している。

聖書の言はそれ自体に目的としての意味があるのではなく、常にイエス・キリストを証し神を指し示し神の意志を提示している。

ＳＣＭが生命ある存在としてこの世に在り働きをなす為に真実に聖書に聞くところから真の生命を受け生々とした歩みを続けていくことを望んでいる。

（明治学院大学学生）

聖書研究の必然性

岩間孝吉

「大学の中でキリスト者としての態度をはっきりと出さねばならない」という意見と、「あれでもクリスチャンか」と言われることのたまらなさ、そうした立場に立たされている私たちにとってキリスト教について特に聖書の有名な箇所について友だちから質問されることは、大きな戸惑いとなる場合が少なからずあります。

ことに同じ専攻学科の上級生に問われたり、またまれには教官から話しをもちかけられる時には面くらうことがあり、あとから考え込まざるを得なくなることもあります。このことは、一時的に自己の生活の反省とか改善をもたらし、「キリスト教信仰を他人に正しく理解してもらうためには自分の毎日の生活を正さなくてはダメだ」という考えに至り、そしてまた、次の瞬間にはそんなことが自分にできるだろうかという疑問を生みます。

生きるという現実と聖書の告げる福音との関係は相互に呼応しあう緊張関係でなくてはならないと主張されますが、それは言葉の上だけの解決に終りやすい危険を感じます。なぜなら私たちの学生キリスト教運動では、ともすると現実的問題か、聖書の一字一句の解釈か、一方だけに走りやすい傾向があり、しかも私たちが最も困っていることは、現在の自分たちが聖書の徹底した勉強にも現実の生活にも徹することもできず、宙に浮上った生活に終始しがちであるからです。

厳密な言い方ではありませんが、「心と心の触れあい（人格の接触）」、つきつめていえば信仰者の一致が教会や学Ｙの中で十分回復されなくては、またそうした前進をしなくては他の友からの質問に対して答えを自己の全生活を通して用意することはできないと思う。

学Ｙで聖書研究を何故しなくてはならないかという問題は、この時どうしても考え続けられねばならない。なぜなら、真に人格の触れあいは聖書の福音信仰においてのみ可能であるから。それ故、何故聖書研究をやるのかということは学Ｙの存在意味に係わる。

聖書研究は就職後役立たぬとか、聖書研究の時のリーダーシップをとる学生の態度や指導者がなれあい的閉鎖的でたまらないといった不満の声に対しても、今私たちの間の隔ての中垣きを取り除くことのできる聖書に基いた置く話合いを回復しなければならないと思います。

（山梨大学学生）

――・――・――

実践に駆り立てて欲しい

―指導者協議会より―

村上和男

天城山荘での会合終って三ケ月経過して、何が現在なお生きて残されているかという反省と、もう一つ、天城山に行く前と帰ってから一体私にどういう変化が起きて、学内のＳ・Ｃ・Ａの中の責任者？として立っているかという反省。前者の場合、特に、理論的に何かが支えられたとは思えない。

自然科学をやっている人の理論のもってゆき方に対して、矢張り自然科学者らしい合理性と論理の

私は本書を読みながら、そこに出てくる聖書のテキストや古今の思想家の著作をていねいに読んで考えてゆけば、どんなに興味深いであろうかと考えさせられた。つまりこれを正読本にしながら、自由に読書指導や聖書研究をつけ加えていったら、すばらしいだろうと思いめぐらしたのである。とくに第四章の「現代とキリスト者」などは簡潔なうちに余韻を含んだ個処であるだけに、その必要を感じる。各処でこのような意味での楽しい研究会が本書を媒介にして展開されることを、切望してやまない。（関西学院大学教授）

（YMCA同盟出版部・定価一五〇円）

「宣教の神学」

クレーマー著
小林　信雄訳

山　形　孝　夫

原題は〈キリスト教信仰のコミュニケーション〉で、序によれば、一九五六年、著者がカナダ・トロント市にあるノックス・カレッジに招かれ、そこで五回にわたっておこなった集中講義をもとにまとめられたものらしい。

それにしても、著者がコミュニケーションの問題にエネルギッシュにとりくんで、それを思索的な仕方で展開するにいたったその背景には、一九四八年以来、文字通り心血を注いでうちこんできた〈世界教会運動〉の生々しい体験があったに違いない。おそらく著者は、〈全世界的な規模でいえば、教会はもはや宣教の不能者になっているのだ〉という悲痛な訴え——一九五四年におけるエヴァンストン会議——を想い起しているのであろう（11頁参照）。

実のところ、こうした訴えをだれよりも感じているのは、むしろ著者自身なのである。それにもかかわらず、彼は、次のように語る。〈たしかに、キリスト教にとって、よき時代は去ってしまった。しかし、過去のいわゆる信仰の時代に、コミュニケーションの断絶が自覚されなかったということは果して幸福なことだったのか。キリスト教の信仰が、普遍的なイデオロギーとして承認されていて、全く疑をさしはさむ余地がなかったということこそ、実は、真のコミュニケーションが断絶していたことの、まことに悲しむべき不幸のしるしではなかったのか〉（147頁参照）。

クレーマーによれば、教会は、この世に属しながら、しかもこの世を越えており、いわば、解き難い緊張の中に生きている。だから、この緊張を自覚し、その重荷をになおうとする切迫感が深ければ深い程却って教会は健康なのであり、逆に、こうした緊張を知ることなく、この世にうまく根を下ろしている教会は、コミュニケーションを喪失しているのである（44頁以下参照）。

もちろん、このような主張の背後には、真のコミュニケーションについての彼自身の解釈が横たわっている。それによれば、真のコミュニケーションとは、聖書的な神の自己啓示そのものであり、そしてそれは、人間の〈愛の応答〉においてはじめて結実する。聖書が語るケリュグマの核心は、まさに、このことが人間存在の根源的事実なのだということにある（13—17頁参照）。

こうした解釈からすると、人間の歴史の全体は、本質的には、コミュニケーションの挫折の歴史としてとらえられることになる。その限り、教会とこの世との間には、本質的な相違など到底あろう筈がない。むしろ、歴史的、相対的制約を身体にまとうキリスト教は、イエスの自己啓示という一点から、非キリス

書評

宮本武之助
「聖書は何を語るか」

小　林　信　雄

このたび宮本先生の新著がYM同盟から出版された。瀟洒な気の利いた装訂で、手頃な分量の本書は、学生諸君の聖書またはキリスト教にたいする入門書として、もっともふさわしいものの一つであると確信する。

従来「聖書入門」あるいは「キリスト教入門」と題する書物が幾種類か書かれていて、それぞれ特色をもっている。ただ聖書を文献として解説しようとすると無味乾燥に陥りやすく、現代の問題に語りかけることが少なくなるという危険をもっている。逆にキリスト教の考え方を現代的に説明しようとすると、聖書それ自身から離れてしまうという危険がある。聖書の構造と内容に関して、正確な理解を与えながら、その思想を現代人に訴えるという仕事は、なかなか困難なものである。教会や学校に関係をもつものは、この種の適当な解説書の出現を首を長くして待望しているといっても言いすぎではあるまい。

本書は東京女子大における講義をもとにして作られたそうであるが、著者もこのような必要を長い間身にしみて感じてこられたにちがいない。その結果生まれたものであることが、本書を読んでいると強く感じられる。

本書は、まず序説「キリスト証言としての聖書」において、聖書の構造とともに、聖書のとりあげ方というものを論じる。聖書にたいするさまざまの異なった読み方の歴史的なタイプを考慮しながら、キリスト証言としての聖書の本質を明らかにする。その後、「神と人」、「信仰と希望と愛」、「キリストにある人間」、「現代とキリスト者」と章を追って、このようなキリスト証言としての聖書が、現代人に何を語るか、とくに章の題目をみても分るように、人間の本質と人間の生き方にどのような指標を与えるかという問題を関心の中心におきながら、論が進められている。簡潔平明な叙述のうちに、キリスト教の根本的な主張が聖書の根拠において、きわめて適確に明示されている。

私は読みながら、本書の内容が講述されているときの学生たちの反応はどうであろうかということを頭のなかであれこれと想像しないわけにゆかなかった。大切な問題が凝縮されて、このような小さな書物に収められるとき、その書の全体の性格や意図をはっきりとつかむことができる。しかしそのためには、集中した注意力と、またいくらかの予備的な知識や思索力を要求されるようにも思う。

たとえば本書をキリスト教主義学校で講義に使い、あるいは学Yや教会の研究会のテキストに用いるとする。そのさいそこに出席する少くとも半数近くのものは、きわめて幼稚な初心者であることが予想される。そしてこれらの初心者にたいしては、本書の内容をまた敷衍して分りやすく説明する必要があると思う。このことを著者も予想していられるにちがいないと思うのである。聖句の引用や、種々の思想家などについて註がついているのはそのためであろう。

教会の礼拝（聖餐式）によって整えられなくては生きてきませんね」ということを私にしみじみと語ってくれた。彼の日頃の生活を思いうかべ、彼の言葉の真実性にうたれて、その内容の重要性と彼の信仰的洞察に敬服を感ぜざるをえなかった。

☆学Yを「証の共同体」と規定してみても、その実状はその言葉から程遠く、その実現は絶望に近い。神なきことを前提として学問を進め、そこには何らの支障を生じない大学―そこには厳しい学問的訓練が要求され、新しい技術と方法が取り入れられる学問の場に、あまりにも無造作に神なるものを持ちだすのは、これ以上滑稽なことはない。弱い我々の信仰と足りない学問的訓練にもとずく我々の証言は大学内にあって何事をもなしえない無力なものであろう。結局学Yは内部の交りと研究の小団体に留らざるをえないのか。

☆にもかかわらず、学内で聖書が読まれ、そのなかから先のような言葉がはかれてゆく。自分たちの無力性と連らなっている教会の無力性がかみしめられてゆく。ここに今日の学生キリスト者のうめきを聞く思いがする。にもかかわらず大学内で聖書にかじりついて生きてゆくもののグループが存在してゆくこと、このことは一体なにを意味するのであろうか。

☆学生基督教運動が自らのうちから従来にまして聖書研究の問題をとりあげ、教会、特に礼拝の問題を徹底的に解明してゆこうと、「教会の生命と使命」企画を取り上げたのは重要な意味をもっている。その意味で今回、聖書研究の特集を考えた。読者のなかには掲載の諸篇にいろいろの批判をもたれると思うが、互いの友情が問題の本質究明へと支えあうことを願ってやまない。（藤森）

ト教化されねばならないであろう。教会史にたいする仮借ない批判を通して鮮明に浮かび上ってくるのは、著者自身の信仰である。それは、あざやかなまでに〈生命的〉であり、ダイナミックであって、読者に強力に訴えずにはおかない。

とりわけ、本書をして、ひときは精彩あらしめている要素として〈現象学的方法〉が用いられていることを指摘しておきたい。とくに、第一章の聖書的視野におけるコミュニケーションは、この手法が生きて、実に見事である。

最後にひとこと。訳者が、原題に添えて、〈宣教の神学〉なるタイトルを付されたことに、どうも抵抗を感じないわけにいかない。一体、宣教とか説教とか教会といったキリスト教的用語には、クレーマーがその故にこそ、そうした用語をさけざるを得なかった非聖書的なモティーフがかくされていないであろうか。少なくとも〈教〉語を基調として造られたそれら一連の用語には、〈コミュニケーション〉という言葉の内包する〈連帯性〉や〈相互性〉への強い傾斜が、致命的に欠けているようにおもわれてならないのである。

（宮城学院女子大講師）
（東北大学講師）

（新教出版社　定価二六〇円）

編集後記

☆昨年の七月、ストラスブール世界会議に出席した時、世界各国から来た代表から「日本のＳＣＭでは聖書研究が伝統的に盛んではないか」と聞かれた。これによると日本のＳＣＭの特色は。その聖書研究にあるということであろう。たしかに、これをうらずける面がある。たとえば、今年の初頭、大阪の郊外で開かれた学Ｙの学生全国委員会でＳＣＭにおける聖書研究—その意義と方法—について熱心に協議されたし、ＳＣＭを本質的に支えるものは聖書研究に他ならないということも基本的に確認された。それにあらゆる学生基督教団体は、なにはともあれ聖書研究をそのプログラムの中心において考えている。

しかし、同時に現状では多くの団体が「聖書研究が生き生きしたものにならず、そこから信仰の源としての力を得られない」というなやみを告げている。いいかえると聖書研究のマンネリズム化に対するなやみである。こうした現状を打開していくことがＳＣＭの中心的課題でなくてはならない。この問題に関する話し合いの出発点として、この特集号を読者の皆さんにとどけるものである。

「教会の生命と使命」委員会はその発足当初よりＳＣＭにおける聖書研究を重んじて来た。この雑誌に聖書研究シリーズをのせたり、昨年も、今年も学生指導者のための全国聖研ゼミナールを開いて、この方面をもっと開拓したいと願っている。去る七月四日—八日、東山荘で開かれたゼミナールでも、聖研によるほかにはＳＣＭの強力な展開も、教会の更新と一致ものぞみ難いことが確認された。

☆この第七号には二月二八日—三月二日、天城山荘で開かれたＳＣＭの指導者を中心にしての第二回「教会の生命と使命」指導者協議会の報告をもかねてのせることにした。ここでなされた講演の一部が、そのままのかたちで、あるいは書き直して頂いて収録された。

☆この度「教会の生命と使命」委員会主事として六月一日から就任された四竈、揚氏を編集部に迎えて大変心強い。この紙面で紹介するとともに、今後の活躍を期待したい。なお四月一日から編集ならびに雑誌発送の事務を担当して下さる渡辺　桂姉の助力をも合せて覚えたい。（李）

☆二月末のＬＭＣ指導者協議会の終了した直後一人の学生が「学Ｙの聖書研究も最後にはそれぞれの

THE STUDENT CHRISTIAN

A quarterly magazine published by the Life and Mission of the Church Committee, at the Student Department, National Committee YMCAs of Japan. 2, 1 chôme, Nishi-Kanda, Tokyo
Hajime Fujimori, Editor

Volume 7 **1961**

The focus of this seventh issue is on the Bible Study in the SCM

昭和三十六年七月三十一日発行（毎年四回）第二巻　季刊「学生キリスト者」第七号
定価　六〇円　一年　二四〇円（送料別）

編集発行者　藤　森　元　　印刷者　三秀舎　　発行所　日本YMCA同盟学生部
内「教会の生命と使命」委員会　　東京都千代田区西神田一の二　振替　東京 20196
電話 (291) 5201—4